

< 論文 > 朝鮮民族南來說 : 日本・中国東南沿岸の 古代文化

著者	月 郎
雑誌名	比較民俗研究 : for Asian folklore studies
号	9
ページ	99-147
発行年	1994-03-31
その他のタイトル	<Articles>Migartion of Korea Nation from South China
URL	http://hdl.handle.net/2241/14300

朝鮮民族南來說 —— 日本・中国東南沿岸の古代文化 ——

月 郎*

本論文では、朝鮮民族が本格的な北方の民族ではなく、北方へ移動した南方の民族の中の一つであることを述べていきたい。彼らの故郷は、現在の中国東南沿岸の江淮平野一帯である。したがって、その生産風俗、暮らし、トーテム信仰、物質文化などは、非常に中国南沿岸の古代文化に似ている。

1 問題の提起

朝鮮民族は東南アジアに長く住みついてきた古い民族として、悠久の歴史をもっている。その存在と発展は東アジア文明の進展に重要な役割を果たした。考古学的な発見によれば、彼らが東北地区に住んでいた時代は少なくとも四千年の久しきまで遡れる。彼らの文化の中には、確かに多くの北方民族的な文化要素があり、このため伝統的な歴史学においては、朝鮮民族が北方民族であるとみなされてきた。しかしながら、もし我々が通説にとらわれることなく、この民族の個性を詳細に吟味し、彼らの生産習俗、生活習慣のみならず、文学、芸術、宗教信仰、物質創造、さらにはこの民族の典型的な体質の特徴も含めて、特別な文化関係をも併せて考察するのならば、この民族の文化は北方文化というよりはむしろ南方文化系統に近いことが明らかにできるはずである。なぜこのようなことが言えるのだろうか。いかなる文化も地域性を持った文化であるということを我々は知っている。その誕生や発展は自然環境のさまざまな制限を受ける。このためどんな文化にも鮮明な地域の特徴がある。文化の交流がほとんど発達していない太古の社会はその最たるものである。例えば、太古民族の中の東胡や鮮卑、肅慎などは、昔から北方に住んでいたため、彼らは濃厚な北方文化の特色を帯びている。生産上は狩猟、放牧、畑作といった北方系の生産習俗を主とし、生活上では、防寒のため、動物の皮を着たり、穴居生活を営んでいた。食生活においては、肉食と雑穀を主とし、防寒のため脂肪をたっぷりとった。『後漢書』『東夷伝』に書かれてあるように、肅慎の古い風俗は、「土地多山險。人形似夫余、而語言各異。有五谷、麻布、出赤玉、好貂。无君長、其邑落各有大人。処長于山林之間、土氣扱寒、常身穴居、以深身貴、大家至接九梯。好養豕、食其肉、衣其皮。冬以豕膏塗身、厚数分、以御風寒。夏則裸袒、以尺布蔽其前后。……種衆雖少、而多勇力、処山險、又善射、發能入人目。弓長四尺、力如弩。矢用楛、

※中国・社会科学院少数民族文学研究所副研究員

長一尺八寸，青石刃鏃，鏃皆施毒，中人即死。」とある。こういう風俗を持つ民族は肅慎だけだろうか。東胡，鮮卑，契丹，室韋，このいずれの民族にもある。水草を刈って居とし，弓を張って狩猟をし，地に穴を掘り穴居していた時代があるではないか？しかしながら，もし我々が最初からもう一度，このいわゆる「北方の古い民族」である朝鮮族の文化を見直してみると，彼らの文化の中には，多くの北方の文化的特質を見いだすことができるが，基本的な文化の土台は北方文化の特質と違いがありそうではなかろうか？むしろ，南方民族の文化に近いのではないだろうか。例えば，生産上は南方系の稲作農業，居住上は干欄式の建築様式（遺痕）とか，食文化では発酵食品，生食，冷食といった慣習などである。前述したように，朝鮮民族は本格的な北方民族なのだろうかと問わずにはいられない。もし，そうでないとしたら，彼らはどこから来たのだろうか。

歴史上，朝鮮民族には，貊，発，北発，貊耳，白民，穢貊，夫余，高夷，高句麗などの多くの呼び方があり，「貊」と「発」が最も初期のものである。貊国に関する史料は『山海経』にあり，『山海経』「海内西経」によると，「貊国，在漢水東北，地近于燕，滅之。」とある。燕国と近いので，この漢水は実際には渙水の間違いではないか。渙水は現在の滦河であるが，古くは渙水と呼んだ。その当時，貊族は渤海北岸の滦河の東側遼東地区にいたと言っても良いだろう。そう考えれば，『史記』「貨殖列伝」の「燕……東綰穢貊，朝鮮，真蕃之利。」との記載に当てはまる。専門家の推測によれば，渤海という名はおそらく貊族が住んでいたことから，その名を得たのだろうと言われている。渤と貊は古代音は同じ「bo」と読む。わりあい早くから使われていた朝鮮族のもう一つの呼称は「発」及び「北発」であった。北は中原を中心とする方位である。「発」は「貊」と同音である。後の「貊耳」と同じように発音する。「発」と「北発」の記載が最も早く見られるのは先秦の典籍『大戴礼記』「少間篇」である。「昔虞舜以天德嗣堯，海外肅慎，北発，渠搜，氏，羌来服。」とある。『大戴礼記』「五帝徳」によると，「山戎，発，息慎。」とある。『管子』「輕重甲」によると，「発，朝鮮不朝。」とある。以上のことからわかるのは，貊は夏，商，周の時代に諸史料に現れていることである。最初の彼らの勢力範囲は肅慎の南，燕国の東，渤海北の遼東半島までである。

先に述べた史料を整理すると，朝鮮族は有史以来，ずっと北方に居たという印象を持つ。南方の民族とはほとんど関係がなく，悠久の歴史を持った北方民族であるかのように見える。この点は，既に動かし難い事実であるようだが，実際にはそうではない。

最初に異議を申し立てたのは，『漢書』の著者の班固である。彼はその著書『漢書』「地理誌」の中ではっきりとこう言っている。「玄菟，楽浪，武帝時置，皆朝鮮，穢貉（貉と貊は音が通じる），高麗，蛮夷。」その後，晋代の孔晁は『逸周書』「王会篇」の中の「発人」と「白民」を定義するとき，東北夷とは言わず，「発」は「東夷」，「白民」は「東夷」と呼んだ。古代中国では，中原の人々は周辺少数民族に対する呼び方を厳しく規定していたことは良く知られている。『礼記』「王制篇」では次のように述べられている。「中国戎夷，五方之民，皆有性也，不可推移。東方曰夷，被髮文身，有不火食者矣；南方曰蛮，彫題交趾，有不火食者矣；西方曰戎，被髮衣皮，有不粒

食者矣；北方曰狄，衣羽毛穴居，有不粒食者矣。」漢朝の班固、晋朝の孔晁はともに歴史上優れた学者であるが、彼らは獬が東北に住んでいることをよく知っていたにもかかわらず、東夷、東南夷または蛮夷だとしたのには理由があるのだろう。歴史的に見た中国とは、正統が強調され、異端は排斥される国であったことを思い出す必要がある。何も根拠がないのに、東北地方に長期間にわたって住んでいる民族を南方の民族であると主張することは、当時の社会環境ではほとんど不可能だった。それでは、班固、孔晁の説明の根拠はどこにあるのだろうか。長期間にわたる熱心な研究の結果、我々はようやく獬と獬が太古の時代に南方に住んでいたという確証をつかんだ。

まず獬族の状況を見ていこう。私は『詩経』の中から獬族に関する二つの史料を発見した。一つは「漢奕」であり、もう一つは「魯頌」である。『詩経』「漢奕」には次のように記載されている。「王錫漢侯，其王其獬，奄受北国，因以其伯。」この詩が語っているのは、燕国に近い漢侯が周天子を朝拝する物語（事例）である。詩の中の獬は間違いなく、北方の獬の獬である。もう一つは、「魯頌」の歌である。「保有鳧繹，遂荒徐宅，至於海邦，淮夷蛮獬，及彼南夷，草不率從，莫敢不諾，魯侯是若。」このなかで詩人は「淮夷」と「蛮獬」の両方について述べ、獬は南方の民族であること、あるいは獬が東南海岸にいる淮夷と遠からぬことを示している。班固、孔晁の説を併せて考えるのならば、獬が現在の中国東南の沿海部にある淮河の南側の淮河平野にいたことが容易に判断できるだろう。

周知の通り、『詩経』の中に記載されている歌謡は、あるものは非常に長い時間的幅を持つ。しかし、「漢奕」、「魯頌」に反映された内容から見れば、両者は時間的に比較的近い。学界における一般的な見方によれば、「漢奕」に書かれていることは、周宣王元年、すなわち紀元前827年のことである。「魯頌」に歌われているのは魯僖公、すなわちおよそ紀元前659年から626年までの間である。これらの二つの詩は、周代の生活を反映しており、時間の差は200年程度である。それでは、なぜ周時代に南と北に二つの獬族が現れたのだろうか。私はその説明は一つしかないと考えている。獬族は東南沿岸部一帯に住み始めた後に、その一部は北へ上り、遼東半島および朝鮮半島に至り、もう一部は現居留地に残ったのである。つまり、朝鮮族の祖先の一つである獬族はもともと東南沿海部の地域に居住し、後に稲作などの南方文化をともなって、海を渡り、現在の遼東半島、朝鮮半島にたどり着き、北方文化と全く異なる南方型文化—朝鮮文化を造り上げたのである。

獬族は「白民」とも呼ばれる。「白民」の呼称が最も早く現れるのは『山海経』である。『山海経』「海外西経」には、「肅慎之国，在白民北。白民之国，在龍魚北。白身被髮，有乖黃，其状如狐，其背上有角。」とある。『山海経』「大荒東経」によれば、「有白民之国，帝俊生帝鴻。帝鴻生白民，白民鎖姓，黍食，使四鳥：虎，豹，熊，羆。」とあり、その白民の国は肅慎の南にあった。さらに「大荒東経」によれば、東方の神帝俊の後代であり、地理的には東北地方に位置していた。したがって、『淮南子』「地形」は「肅慎民，白民，沃民」をともに海外の三十六国のうちに数えている。ところが興味深いことに、我々は南北白民を見つけたと同時に太古の東南沿岸部の白民がいたことを発見した。

覚えておられる方も多いと思うが、『竹書紀年』に述べられている九つの夷の中に「白夷」がある。『逸周書』「王會解」によると「白，州比閭，比閭者其若羽，伐其木以為車，終行不敗」とある。注釈によれば、「白，州，東南蛮，与白民接地。」とある。ここで言う「白」は于，於，方，黄，白，赤，玄，風，陽という九つの夷の中の白夷を示す。古くは山東沿海部に住んでいたらしい。州は現在の安徽懷遠で，いずれも東南沿海地域である。ここで言うところの白民が，東南沿海部にいたことはまちがいない。

西漢に至り，偉大なる歴史家司馬遷は『史記』の中で，はっきりと二つの「発」の問題を取り上げ，以下のように述べている。舜，「南撫交趾，北発，西戎，析隻，檠搜，氏，羌，北山戎，発，息慎，東長，鳥夷。」⁽²⁾ 何光岳氏は次のように考えている。「「発」は北発ともともと同族であったが，後に二つに分かれた。北の発は北発と呼ばれ，山戎，肅慎と接していた。しかし，「南撫交趾，北発」という文中の「北」という字をとり，「南撫交趾，発」に直すべきである。この発は番，すなわち番禺であり，その地域は交趾に接していた。そして，下の文「北山戎，発，息慎」の「発」の前に「北」という字を入れ，「北山戎，北発，息慎」と改めるべきである。このようにすれば，正しい方位となる。つまり，蕃，番吾，蒲吾，亳は，現在の河北の平山を指しているのである。」⁽³⁾ 何氏の言う「発」および「北発」に関する地理的な方位の理解は，私の理解とは少し異なっているが，古籍の詳細な分析は今後も参考になる。

前述してきた史料を整理することによって，我々は中国の歴史上に，南北の貉が存在しているという事実を認めることができるだろう。

さらに穢族の様子についてみてみよう。前述したように，貉族の呼び方の紹介の際に「濊貉」という単語が出てきた。濊貉と言うと，学界には二つの学派がある。その一つは，日本の白鳥庫吉，三品彰英，池田宏，朝鮮の文崇，我が国の金毓黻を始めとする人達である。濊と貉は古代から一つの族であり，両者を一緒に呼んで穢貉となったり，略して濊と貉となったりするなど，その両方があるとする説である。もう一つの説は，我が国の凌純先生，日本の鳥居龍蔵氏などの学者であり，彼らは濊と貉は実際には二つの族であると考えている。私は，濊と貉は太古から同一の民族ではなかったが，この二つはずっと隣接し，おそらく同一婚姻集団の二つの組になってきたために，よく似ているのだらうと思われる。前述したように，貉族は，古くは東南沿海部に居住し，北は淮夷と接していた。淮河の南の江淮平野における，濊と貉のこうした特殊な関係を考慮すれば，濊族の故郷もそこに近いことが推測できる。何光岳氏の分析によると，「商代の濊の居住地は中原一帯であった。現在，安徽の西北にある浚水は，又の名を渙水ともいい，古代には濊水と呼ばれた。源流は河南開封の南にある。東南へ向かう流れは，安徽北部へ至り江淮に入る。この名は古代の濊人が，この一帯に居住していたことから来たのであろう。」⁽⁴⁾ 推察するところ，古代の濊と貉が居住し，東南部に居住していたことは確かである。貉族は淮河の南の江淮平野に居住し，濊族はその少し西北の濊水と淮河がぶつかる所にいたのである。その後，貉族の一部が北上し，婚姻関係があった濊族も同じく北上したために，濊貉と並べて称されるようになったのである。

穢貊の穢は、たいてい穢と書き、そのもとの字は歳である。「禾」の部分はこの民族の曾ての生産方式を示すものである。それは箕が朝鮮に至って穢人に稲作と養蚕を伝えたと『後漢書』に記載されていることと偶然一致する。また、孫進が曾て「穢は農業に従事した」⁽⁵⁾といった論断と符合しないのである。上古における音韻の視点から考えれば、歳は戊と上古においては同じ音、同じ字であり、すべて魚の音韻に属するものである。歳（穢族）はまた、戊（越族）であり、戊（越族）はまた、歳（穢族）なのである。ここから分かるように、東北の穢族は太湖流域の越人に相当するのであり、恐らく文化的に直接の関係があるのに違いあるまい。

ならば、東北の穢族はいったい南方のどの越人に似ているのだろうか。また、彼らが北上した後に、どのような文化に変化したのだろうか。そのことに関して、衛聚賢氏は、「呉」という字の形、聲、義などについて考察し論じた後、以下のように述べている。「甲骨文字と金文字にある『呉』という字は、『形における呉は魚を示す。』『発音における呉は魚（イウ）と呼』んでおり、魚は於、虞、呉と通じるから、いわゆる呉越は、すなわち於越であり、太古の時代の呉および越と同源なので、同じ民族共同体であると言えるだろう」⁽⁶⁾。今の問題は、もし呉と越が発音上同源のものであり、穢と越が同じ祖先を持つならば、穢も必ず呉とともに太古の文化、トーテム信仰の面で共通することがあるだろうということである。字の形から見ると、甲骨文字と金文の呉という字は、𠂔、𠂕、𠂖、𠂗の形をしているが、短足の両生類である山椒魚（学名は鮟）にとっても似ている。魚の形で部族を象徴することから、昔の呉族が鮟に富んでおりそれを崇拜することで有名であったことが知りえよう。それは、河姆渡文化の遺跡から発見された山椒魚の図案でも証明されたのである。『逸周書』『王会解』では、「成周の会」に穢族がやってきたが、穢人の前（「前儿」）には、猿のような動物が立ったまま歩き、声は子どもの発音に似ていた」と記載がある。ある学者は、穢族が「成周の大会」で献じた動物は山椒魚であると考えている。思うに、呉族は、確かに山椒魚が多くそれを崇拜することに大きな特徴があったのである。もっとも興味深いのは、呉越の一部の人々が北上した後、こうした信仰を持って朝鮮に移り住みはじめたことである。『説文』の中において「鮮」という字は、「鮮とは魚の名で、貊国で生まれた」と説明されている。実は、その「鮮」（シエン）はまさしく「前儿」（チアル）の速読の略語である。彼らは、それを象徴にして、鮮国を成立させ、鮮族と自称してきたのであろう。

音声学の視点から考えてみると、夫余、高夷、高句麗などのいくつかの穢貊民族文化と密接に関係する民族は、南方文化にも係わっている。夫余はまた扶餘のことであり、全漢時代には、現在の松花江の中流地域に政権が建てられていた。『後漢書』『東夷傳』によると、「夫余国、本穢地」とある。『三国誌』『夫余伝』にも記載があって、「其印文言（穢王之印）、国有故域名穢域、蓋本穢貊之地、而夫余王其中、自謂亡人抑有以也。」とある。後漢時代には、夫余国は国王がいて「夫台」⁽⁷⁾を国名としていた。夫余（扶餘）でもよく、また夫台でもよいのであって、これら夫余国と関連する名称は、夫于、夫重、夫鍾、夫差などの呉国の名と似かよっており、すべて名詞の直前に敬語の接頭辞の「夫」が加えられていたのである。だから、夫余文化には呉越文化と共通性があることが知りえよう。『後漢書』『東夷傳』にもやはり次のように述べられている、穢人は「句

麗と同種であり、語言、法律、習俗ともほとんど同じであると自らが言っていた」と。朝鮮族は自らを、句（発音は勾）麗、高夷などと呼んでいたが、自分の祖先の朱蒙を高朱蒙と呼んでいた。筆者の考えによると、高（句）という敬語の接頭辞の元は呉越に起因するものとみなされる。呉国では、「句」（発音は勾）または「姑」が最初に書かれている地名や名前が非常に多い。例えば、句陽、句踐、句繹、須句、臨朐、朐山（現在の連雲港市に属す）、朐県（現在の連雲港市に属す）や姑蔑、姑水、姑幕、姑蘇、薄姑、薄梁（現在の連雲港市）…などである。以前の多くの学者は、それを発語の辞であると認識していた。しかし、私はそうではないと考えている。なぜなら、発語の辞はいつも文頭に使われるが、名詞を修飾するだけであるため、同じものではないからであろう。現在、こうした現象は日本語に残っている。日本語では、この種の敬語の接頭辞は「ご」と書き、文を読む時、普通は名詞の前に置かれる。例えば、ご恩、ご両親、ご説明などである。時には名詞の後に置くものもある、例えば、花嫁ご、姉ごなどである。用法上、呉語の「句」と同じであるが、それは中国東南海岸の太古の文化の高麗文化および日本文化に対する多大な影響を反映しているのである。

これまで述べてきた資料の整理を通じて判断すると、中国の上古社会では南北の二つの穢貊族が併存していたことは、容易に否定できない歴史事実であることが、はっきりと見えてくる。輝かしい朝鮮族の伝統文化は穢貊族が北上した時に、朝鮮半島に持ち込まれた産物なのである。したがって、彼らの生産および衣食住などの習俗、あるいは宗教、信仰、物質文明などの側面から考えてみると、中国東南の穢貊の原始文化と期せずして一致する部分が多いのである。

2 生産習俗 — 稲作文化の様々な見方 —

中国は国土が広く、物産が豊富である。気候や緯度などの原因で、その原始的農業は長江、淮河一帯を境に、だいたい南北二つの文化系統に分けられる。一つは稲作を主とする南方稲作文化系統であり、もうひとつは雑穀作物を主とする北方畑作文化系統である。前者は西北地方から東南地方へと広まり、後者は東南地方から西南地方へと広まり、まるで時計の針が回転するように展開し、中国農業伝播の主要パターンを構成している。とりあえずこれを中国農業文化伝播の内循環と呼ぼう。これに相對するのが中国農業文化伝播の外循環であり、これもまた二つの成長点に分けられる。一つは西北地方から西南地方へと発展した、牧畜業を含めた畑作農業であり、もう一つは東南地方から東北地方へと発展した稲作農業である。それらの伝播経路はいずれも外側に偏っているため、中国農業文化の外循環系統と呼ぶ。内循環系統と比べると、外循環系統は規模が小さくて史料が少ないだけでなく、伝播経路もはっきりしていないので、研究が非常に困難である。以下で考察する朝鮮稲作文化と太古の中国東南稲作文化との関係という問題は、こうした難題の一つの鍵となるものである。

中国南方の稲作栽培は悠久の歴史を持ち、地域も非常に広く、長江中下流域から雲貴高原にまで分布している。これまでのところ、江蘇、浙江、安徽、湖北、雲南、広東などの省の新石器時

代の遺跡からは、いずれも粳が発見されている。中でも、河姆渡文化遺跡は最大のものである。河姆渡は浙江省余姚県境に位置している。これは江蘇省無錫の仙蠡墩遺跡、南京の廟山遺跡、江蘇省呉県の草鞋山遺跡、上海青浦県の崧沢遺跡、浙江省呉興県の錢山漾遺跡、杭州の水田畝遺跡、浙江省桐郷県の羅家角遺跡などとともに、中国東南沿海稲作文化圏を構成している。この文化圏の北側は淮河に面しているが、淮水は古代淮夷の発祥地である。『詩経』「魯頌」では淮夷と蛮貊を併記しているが、このことからこの地が淮夷に近い稲作文化圏であり、朝鮮族の祖先一穢貊人の大昔の居住地だったことがわかる。朝鮮族の稲作文明は、ここに端を発するのである。

考古学者の紹介によると、河姆渡文化は我が国の考古学界が発見した、年代が最も古く（今から7000～5000年前）、内容が最も豊富な稲作文化遺跡である。1973年冬から74年春にかけての第一次発掘だけでも、第四文化層で約400m²の粳や粳殻及び藁の堆積が発見され、その厚さは10～40cmと一定していないが、最も厚いところでは70～80cmに達していた。これは穀物が腐った後で長い間に自然に沈下した結果であって、もとの厚さは1m以上あったのである。仮に厚さの平均を1mとすると、そのうちおよそ4分の1は粳や粳殻であり、粳は120t以上だったと換算される。これは驚くべき数字であり、当時の南方稲作農業の規模を説明するのに十分であろう。

南方の河姆渡人が米や魚を食していた頃、中原の人は稲のことを全く知らなかった。水稻は熱帯、亜熱帯の作物であり、緯度が比較的近い地区では（海拔の変化が小さいことが前提であるが）、移植に問題はないが、緯度をちょっと越えて北上しようとする、たちまち相当困難になり、少しずつ適応させてゆくという過程を経ねばならなくなる。従って、後漢の時代になって、ようやく漢人が遼東を開拓して稲を植えたという記載を見いだすのである⁽⁸⁾。これは中華民族の歴史の中では、非常に後になってからのことであり、こうした稲作文化が北方民族に伝承していなかったとまでは言わないが、数千年来、北方民族は依然として畑作農耕文化を主としてきたのである。

ところがややこしいことに、朝鮮では遅くとも無土器時代（すなわち紀元前10世紀以前）⁽⁹⁾、周辺の民族がまだ稲作とは何かを知らない頃に、もう水稻を植え始め、大規模な稲作文化の生産に従事していたのである。1977年11月、韓国考古学界が朝鮮半島南端に位置する扶餘松菊里遺跡を発掘したところ、大量の炭化米が出土した。炭化米の出土は、早くとも無土器時代において、朝鮮族の祖先がすでに水稻栽培技術に習熟し、比較的大規模な稲作生産を開始していたことを示している。

朝鮮民族の昔の農業文化類型については、中国の史籍中にはっきりした記載がほとんどないのであるが、幾つかの史籍の中から、この民族の昔の農業の性格を浮き彫りにすることができる。例えば、『周礼』「職方氏」で九州（中原の九つの州）の農業の状況について言及した際に、「東南楊州、其谷宜稻。正南荊州、其谷宜稻。河南豫州、其谷宜五種（孫注：五種、黍稷菽稻麦也。黍稷稻麦、經有明文、菽則郭以目驗地之也。）正東青州、其谷宜稻麦。河東冀州、其谷宜四種。正西雍州、其谷宜黍稷。東北幽州、其谷宜三種（黍稷稻）。」と述べている。

ここから判るのは、九州のうち、冀州と雍州が稲作に向かないのをのぞくと、その他の地域ではいずれも稲作が可能と言うことである。『周礼』で述べられていることは、だいたい正しい。

例えば、「東南楊州，其谷宜稻」と述べているが，結果的に考古面で青浦県崧沢稲作文化遺跡や杭州水田畝稲作文化遺跡，呉興県錢山漾稲作文化遺跡が発見されただけでなく，世界でも最古で規模も最大の河姆渡稲作文化遺跡まで発見されたのである。「正南荊州，其俗宜稻」の記述は、『史記』『貨殖列伝』の「楚越之地，地広人稀，飯稻養魚」という記録が証拠を与えている。現在の我が国の水稻分布から見ると，冀州などの地域は確かに稲が少ないが，原因の大半は乾燥して雨が少ない点にある。十個の太陽が一斉に昇るとか⁽¹⁰⁾，黄帝と蚩尤は冀州の平原で戦うといった神話は⁽¹¹⁾，昔の冀州の民がこの地区の乾燥少雨という現象を指して言った，最もわかり易い解釈である。史料の記載によると，古代の朝鮮族はまさに前の方で述べたところの幽州と青州の一部に居住していた。『周礼』『職方氏』は「東北幽州，其谷宜三種（黍稷稻）」「正東青州，其谷宜稻麦」と述べているが，これはすなわち東北にも稲作文化があり，稲作民族がいたことを述べているのである。私はこの稲作民族というのが太古の朝鮮族の祖先—貊人の流れをくんでいるのではないかと考えるのである。

『山海経』は我が国有史以来最初の地方志であり，最初の旅行記でもある。『山海経』中の各経の方角や位置については，従来諸説が入り乱れていた。大多数の学者はそこに描かれた地理的範囲は今日の中国の版図とだいたい合致すると考えているが⁽¹²⁾，ある学者はそれを全世界の範囲に拡大し，「東山経」の一部は中国本土だが，「海外東経」，「大荒東経」はアメリカ大陸太平洋海岸であり，今から6000年～5000年前に夸父族人や少昊族人，顓頊族人がアメリカ大陸へ大規模に移住した」と考えている⁽¹³⁾。

私は『山海経』で描かれているのは，主に北方の状況であると考える。

まず，神の系列から見ると，『山海経』は主に三つの祖先神の状況について述べている。一つは帝俊で東方神であり，帝嘗や伝説中の帝舜，殷虚の卜辞中の高祖夔に相当し，主に東方（東夷）を統轄する。『山海経』は帝俊を中心に，東方の史事を特に詳しく記述している。その次は東北方面の祖先神である帝顓頊で，三苗を含む東北地方の住民を統轄する。苗族の祖先である蚩尤は黄帝と冀州の野で戦い，敗北した後に荊楚に逃れた。楚の大天屈原が『楚辞』の中でよくとりあげる祖先神「高陽氏」とは，帝顓頊のことである。この頃の歴史については，古籍中の記載が少ないが，一方で苗族の風俗中には，この頃の出来事についての記憶が留められている。四川省南部，雲南省東北部の苗族の女性は口ウ染め柄のスカートの着用を好む。こうしたスカートのすそには，三本の太くて白い線模様が走っている。苗族の老人の話では，上の線は渾水河（黄河）を表し，中の線は清江（長江）を表し，下の線は大平原上の田んぼを表すという。大昔の苗民は黄河を越え，長江を渡り，西南地方にまで移動したのである。当時の黄河の河口が天津にあったことを考えると，三苗の故郷は渤海北岸にあったことがわかる。『山海経』『大荒北経』によると，苗民は「西北海之外，黒水之北」にいた。『山海経』『海外南経』は「三苗国在赤水之東」と述べている。私は，ここで言う「海」とは渤海を指し，「黒水」は昔の玄水である。玄とは黒であり，また青でもあって，今日の遼寧省東部の青龍河のことである。赤水とは濛河のことで，この河は旧称を濡水および渙水というが，また烏蘭水とも呼ばれており，「烏蘭」（ウラン）とは東胡語で

赤色のことである。この言葉は蒙古語の中にまだ残っており、例えば、「赤い木の芽」のことを「烏蘭木騎」（ウランムチ）と言う。ここから分析するに、移動前の古三苗は、渤海北岸の青龍河と滦河の間に生活していたはずで、もし南方へ移動するなら、どうしても滦河と黄河、長江を越えねばならず、従って、私は苗族女性のスカートの三本の白線は、彼らが南へ移動した際に渡った三つの川を示しているのではないかと考える。その他の史料一例えば苗族の祖先である姜央が卵から生まれた、などといったものについても、東夷諸族の鳥生神話を非常に容易に連想させられるのであるが、ここではいちいち列挙しない。『山海経』の中に現れる、資格と経歴がもっとも古い祖先神は黄帝である。彼は本来西北地方に住み、後に東へと移動したのであるが、『山海経』に描かれているのは、まさに東遷の後に冀州で蚩尤と戦う黄帝である。総じて、神の系列から見ると、『山海経』に記録されているのは主に東北地方および東方の出来事であるに違いない。まさにこのため、『山海経』の中には東胡、朝鮮、貊、氏、羌などの北方民族がしばしば現れ、南方民族の記述が比較的少ないのかもしれない。

地理学的見地から見ると、『山海経』『五藏山経』中の「南山経」の部分で描かれている地域でさえ、依然北方の範疇を越えていない。例えば、『山海経』『南山経』では「又東五百里、曰丹穴之山、其上多金玉、丹水出焉、西南流注于渤海」とか「又東五百里、……凡水出焉、西南流注于渤海」と述べている。「南山経」で述べているのは、依然渤海北岸を越えるものではなく、『山海経』、少なくとも「五藏山経」の地理範囲はだいたい北方から出ないことがわかる。学界にはある流行した見方があり、それはいわゆる「渤海」とは実は南シナ海を指し、渤とは大きいという意味だと考えるものである。実際にはそうではない。天文学的見地から見ると、『山海経』『南山経』の中の最初の山＝招揺之山と最後の山＝箕尾之山は、どちらも二十八宿に基づき命名されたものである。招揺と箕尾の星は、どちらも東北方向の上空にあり、「五藏山経」で描かれているのは確かに東北方面の状況であることがわかる。経文中に現れる漢以降の南方諸地域の名称は、おそらく後の人が書き加えたものであろう。もし以上の分析に間違いがなければ、すぐにも一つの結論が自然に導かれる。つまり、南方稲作文明が勃興した後、乾燥少雨の冀州を飛び越し、北方すなわち渤海北岸においては、稲作文化の活発な地帯が出現するのである。『山海経』『南山経』では、「次」という漢字の後方に以下のような結語を置いている。「凡雝山之首、自招揺之山、以至箕山、凡十山、二千九百五十里。其神状皆鳥身竜首、其祠之礼：毛用一璋玉、粢糗用稌米、一璧・稻米・白菅為席」。『南次二経』では以下のようにいっている、「自櫃山至于漆呉之山、凡十七山、七千二百里。其神状皆竜身而鳥首。其祠：毛用一璧、粢糗用稌」と。『南次三経』では以下の通りだ、「自天虞之山以至南禺之山、凡一十四山、六千五百三十里。其神皆龍身而人面。其祠、皆一白狗祈、糗用稌。」以上に書かれた祭祀の特徴は、一、祭られた神はみな鳥および龍のトーテムに関係がある故に、神の型は鳥の頭に龍の胴体、逆の方にもある点。二、糗を埋める習俗がある。瘞は埋蔵という意味で、それは太古における土を祭る反映である。『呂氏春秋』『任地』に「有年瘞土、無年瘞土」という記録があり、年は谷である。その意味は豊作になれば畑を祭ってその功績に報いる。不作になれば大地を祭って神にお祓いをするである。三、供物はだい

たい上等な米と粳米を使うのである。「稔」は完熟期が長くて、質量が高いお米を指し、「粳」は粳米しか指さないのである。四、白菅を席にする点。このような儀礼を行う人が誰であるかは、まだ結論を出せない。推測すると、おそらく苗族あるいは朝鮮族が関わっているだろう。その理由の一つは、『山海経』『南山経』で述べられている地理的な範囲が朝鮮族、苗族の昔住んでいた所とよく合っているからである。つまり、渤海の北沿岸の赤水、黒水流域にあり、燕地に近いのである。もう一つは農業文化の型が類似している点である。苗族と朝鮮族はどちらも稲作の伝統を持ち、稲で祖先を祭るのだが、こうしたことは東北地方の他の民族では全く不可能である。苗族と朝鮮族のどちらかを選ぶとすれば、私は後者を選択するつもりである。なぜかという、朝鮮族は白色を尊んだが、苗族は黒色を尊んだ故に、祭祀の時には白菅を席にする。これはもっとも朝鮮族の心理に合っている。朝鮮においては供物を埋める習慣がある。(図1) 苗族にはその習慣はない。また、朝鮮族のシャーマニズムでは鳥(鶴や鶏など)、竜などをいつも神像として人々に祭られていた。前述したように、朝鮮族の祖先—濊貊族の源流は南にあるが、呉越の祖先と同じである。越人の中には「鳥相」がいる。『史記』『越世家』によれば、越王勾践は「長嶺鳥喙」、又は「蛇相」の持ち主である。『天下郡国利病書』には、『潮州誌』を引用し、「以南蛮為蛇種、觀其蛋家神官蛇像可知」と、『尚谿紆誌』にも、「其人皆蛇種、故祭祀皆祭蛇神、其像冠冕南面、尊曰遊天大帝。倉中皆蛇也。」という記録もある。呉越族の神龕の中の鳥の頭に蛇(竜)の体という形のトーテムは「南山経」の中の「状皆鳥身而龍首」や「状皆龍身而鳥首」などの神像と全く同じだと考えられる。従って、「南山経」の中に述べられる民族はまず呉越地方から来た朝鮮族の祖先に違いないであろう。

北方の稲作文化の発生は南方の稲作文化の影響を受けて生じたものであり、東南沿海部にいる朝鮮族の祖先—濊貊族が北上すると共に持ち込んだ文化である。それによって、朝鮮族と東南沿海部の民族は稲作文化において、労働道具、稲の種類、作り方および農業信仰など各方面で極めて類似しているのである。(図2)

次に、朝鮮と東南沿海部の古代における農具の異同を比較させていただこう。

韓国と日本の考古発掘において、よく発見されるのは、双穴石鎌であり、その形は月に似ている故に、半月形の石鎌とも言われている。形から見ると、日本、韓国および中国の東南沿海地域で出土した双穴石鎌とは全く同じであるが、年代は、中国の方が早いので、石鎌の源流地はおそらく中国東南沿海部の稲作文化圏にあるのだろう。その後、民族の移動に従って、その一部は西へ行き、揚子江に沿って雲南に至り、今日その地域では石鎌の考古発見が多い。もう一部は北上し、石鎌および稲作文化を持ち、朝鮮、日本に入り込んだのである。西団山文化遺跡はこれまで考古学界では、濊貊族の居留地であると見なされてきたが、そこで我々は前述した地域と類似する双穴石鎌を発見した。それは中国東南沿海部の稲作文化圏から双穴石鎌を持って北上した民族が朝鮮族の祖先—濊貊族である証拠だと思われる。

古代の農具に着目すれば、朝鮮と中国東南沿海部との類似点はかなり多い。周知の通り、百越の「越」は自称ではなく、他称である。その呼称は農具の名称から来たものであり、すなわちそ

の農具を使う人の代名詞である。その農具は「戊」であり、甲骨文字のなかで象形文字に属し、象徴している形については、学界では三つの説がある。

まず第一の説は、良渚文化遺跡から発掘された三角石鎌の形を表すというものである。梁釗韜氏は、良渚の主な生産道具は磨製の三角形石犁、つまり犁であるとしている。『越絶書』『越絶外伝』の中で、公孫勝が呉王に夢判断をした物語がある「呉王勞曰、「……見兩犁倚吾官堂……」、公孫勝伏地有頃……因悲大王曰、「見兩犁倚吾官堂者、越人入呉邦、伐宗廟、掘社稷也。」そこから、戊は犁であり、越人はかつて戊に例えられて名付けられたことがわかったのであると指摘している⁽¹⁴⁾。

第二の説は、扁平穿穴石釜の形を表すというものである。汪濟英氏は、「戊」は我々が普通に言うところの扁平穿穴石釜であり、馬家浜文化から発生し、良渚文化で盛んになったのである。……良渚文化の時期において、その磨製の扁平穿穴石釜、すなわち石戊はおそらく生産道具の中から分離され、戦争に用いる武器、あるいはそのシンボルとしての役割を果たしたと推測される。……総括すると、石戊は扁平穿穴石釜であることを肯定すべきだ。」という意見を発表した⁽¹⁵⁾。第三の説は、有段石磬を表すというものである。「我々は石器時代まで遡り、戊は柄が入られる有段石磬を示すべきだと思っている。古代の越族が多くの石磬および有段石磬を使っていたことは、北の華夏族が石釜を多量に使用していたことと違っていることが、近年東南地域で発見された石磬や有段石磬などによって証明できるのである。」⁽¹⁶⁾。

以上の諸説の中で、筆者は第三説に賛成する。なぜかという、まず『説文』をもって説明させていただこう。『説文』は「戊」を説明する場合に、「戊は釜である」と書いてある。すなわち中原の華夏族の目から見れば、戊は中原人の用いた石釜のような物と類似し、犁は形にしてもその応用にしても釜と違う全く関係ない物であり、扁平穿穴石釜の方は釜の形をとっているけれども、釜の実質的な応用性がなく、働く時、中原の石釜と同論できない物であり、有段石磬こそ釜の特徴が充分発揮できるものである。だから、南のにわか雨がやんだ後、古代越族の遺跡から洗い流され出てきた石釜（有段石磬）はすぐに雷神が残した「霹靂釜」や雷の釜などだと思われていることは、有段石磬と石釜との類似点の一端をうかがうに足るであろう⁽¹⁷⁾。

有段石磬は紀元前4000－5000年の新石器時代から使われ始め、その発源地は中国東南沿岸地域にあり、それは北方の石釜と対応し、南の特徴を持っている新石器文化である。今までの考古学の資料から見れば、余姚の河姚渡、南京の北陰陽營、江西の九江大王嶺、福建の閩侯雲石山、上海の馬橋などの文化遺跡では、多かれ少なかれ有段石磬が掘り出されている。例えば、江西的清江呉城遺跡の1、2、3期文化層の中から石磬34件が発見され、その中に有段石磬だけで16個もあり、発掘した石磬総量の49%を占めている。東南の先住民の古代文化の一つとして、民族の移動に従い、周りに広がり、一つは西に向かって雲貴高原に入り、一つは北上し、山東、遼東半島及び朝鮮を経て日本に着いたのである。日本の有名な歴史学者江上波夫氏によって編集された『日本人は何か』という本の中でも、はっきりと以下のように指摘されている。「このように、すでに弥生時代には日本と中国大陸との関係が密接についていました。中国大陸の江南から米文化を

もった人々が北九州に渡来したのですが、彼らは稲作だけではなくて、稲作に必要な農具をつくる石器とか、収穫のための石器などもいっしょに持ってきた。弥生式の石器は、江南のタイプにいちばん近い。それらは中国北部とか東北アジアとかにつながるものではありません。もっとも、かつては、その方面の石器文化につながると思っていたのですが、いろいろな方が調べた結果、抉入り鑿型石斧とか石包丁とか、あるいは扁平な石斧とかの弥生式石器の代表的なものが、中国大陸のどこのものといちばん似ているかといえば、やはり江南だということが確かになりました。つまり、その方面から、そうした文化をもってきた人が西日本にいたことが明らかになったのです。」浙江農業大学の流修齡教授は、その著作『太湖地域の稲作及び稲作文化』にこう書いている。日本の石鎌は日本の新石器―弥生時代の代表であり、その石鎌は稲作と共に揚子江中下流域から日本に伝わったのである。九州で広く分布する磨光石礮、石釜は揚子江中下流域の石礮が、石釜と似ている点は稲作農業と密接していることを表すのである。朝鮮、日本、中国東南沿海部の有段石礮の類似性は両地の緊密な淵源の関係を良く表しており、日本と朝鮮、中国東南沿海部の有段石礮の類似点は、彼らの間にやはり血縁関係があることを表しているに違いない。(図3)

古代の東南の先住民は、有段石礮の発明と同時に、耘田器骨耜も発明した。骨耜は河姆渡文化の代表的な道具の一つであるが、第4文化層だけで、170余りが出土した。「骨耜」は大型の哺乳類(水牛かもしれない)の肩胛骨を加工して作られており、長さは20cm位で、肩臼のところに横に四角い穴を掘り、薄い骨ならば四角い穴はないのだが、それを半月形に磨き、表面の中央に縦溝を浅く削りだし、縦溝の両側に穴を掘る。柄を装着する時には、柄を骨板の浅く削った溝に垂直にくくりつけて取り付ける。四角い穴に藤のつるを通して柄の端に固くしばりつける。その頂点に丁字形のようなものを作ったり、又は「才」形の穴を掘るのである。

河姆渡3期と銭山漾文化では、中国東南部の沿海では、木耜、あるいは木千節と呼ばれている一種の掘削および除草のための道具が出てきた。東南考古学、そして現在でも杭嘉湖地区でそのような道具が使われていることから考えると、其の道具は木で作られ続けられており、軽くて、土を掘るときに頭部の磨滅を防ぐために、石を丹念に磨きだした「石耜冠」で端の部分を包んでいる。(現在では、鉄製になった)「骨耜」と同じように、その木耜は「釜筒」がなく、巧みな結び方によって柄を装着する。すなわちまず木耜の柄と手持ちの部分をよくしばりつけて、その後楔を入れる。こうして、木耜の使う面と手持ちの部分が一体となって、使用に耐えられるようになるだけでなく、すでに楔を入れたので、木耜の使う面と手持ちの部分の間に角度が形成され、腰を曲げて土をならし、除草する必要もなくなるので、体力の消耗が大いに節約されるのである。(図4)

韓国における考古史料の不足のため、我々は中国南方の骨、木耜文化が朝鮮と日本に伝播したのかしなかったのかを確実に判断する術はない。しかし有段石礮が北上した情勢を考えると、私は骨、木耜が北上した可能性もまた大いにあると考えている。ある説明によると、以前韓国の忠清南道の大田付近で、青銅器が出土した。銅器は不完全なものであったが、表面の鑄造された図案はまだかすかに見ることができた。残っていた図案(正面)は三つある。まず一つには、羽節

りを頭にした男性が鋤で畑を耕しているものであった。二つ目には、ある男の子が石斧のような道具を使って、何かを砕いているように思われるものであった。三つ目には、羽飾りを頭にかぶっている老人が馬を追っているものである。これらの三つの表面に描写されているものは、おそらく土を耕し、土くれを砕き、種をまいて馬を追っている春耕図なのだろう。(図5) 図の中の男性の手に握られている道具は、その使用法、つくり、デザインから考えても、すべて中国東南沿岸に出土する有段石礮に似ている。ある関係資料の説明によると、朝鮮人は春耕整田を行うときには、常に「榑木」という道具を使って土くれを砕く。それならば、中国東南から伝来した有段石礮こそすなわちその原型ではないだろうか。次に、図案の田を耕す男が使っている鋤を見てみよう。注意深い読者は、その男が使用している鋤は、我々が一般に使う鋤とは全く異なるものであることに一目で気づくだろう。普通の鋤は、鋤の板と柄の部分の角度がかなり大きい。(170度前後である) しかしながら、この鋤は鋤板と柄の交わる角度がかなり小さく、約140度程度しかない。自分の経験によれば、その鋤は北方の農具とは異なり、かえって前述の東南沿岸部で出土した古代の骨耜、あるいは木耜に似ている。これらの(木耜)は銚筒がなく縛ってから楔を入れる方法が用いられており、固定した後、鋤の表面と柄の手持ち部分との角度が韓国の青銅器の表面に浮き彫りにされている鋤とほとんど一致する。これらのことに、本当に淵源関係があるのかどうかについては、韓国考古学界の発見が待たれるであろう。

稲の品種に関する研究。日本を訪問した期間に、日本の中国民話の会の要請に応じて、私は朝鮮と中国南方との文化関係に関する学術発表をした。その後、ある友人たちが、私に質問した。河姆渡から出土した稲の種類は籼米に属するものだが、ところが朝鮮、日本の稲は粳米に属しており、品種が異なっているのに、どうして朝鮮、日本の稲作文化や稲が中国の東南沿岸に源を発するものだと言えようかと。実際には、その点には誤解がある。考古学界の鑑定によれば、河姆渡や羅家角で出土した稲は籼米と粳米の両方であった。しかしながら、籼米の割合が多かった。例えば、浙江の桐郷羅家角第120号探方から300粒の米が出土したが、識別可能な米の中で、籼米は64.74%を占めた。また粳米は35.27%を占めた⁽¹⁸⁾。このため粳米がなかったとは言えないだろう。実は河姆渡遺跡の出土したものにも類似することであったのである。

朝鮮において、粳米が多く生産される原因は南北の気候の違いに関係するのだろう。周知の通り、淮河は中国気象学では有名な温度線となっている。淮河の北側では、年間降雨量が800mm以下で、揚子江流域では、1000mmを越えている。さらに年間平均気温は、ほとんど15℃以上である。それによって、卜類の「中国農業の分布」では、その線を我が国の麦と稲の境界線にしている。興味深いのは、この「魔河」は中国南北農業文化の類型に影響するだけでなく、時には移植植物の種類にも影響を与えている。「橘生淮南則為橘、生於淮北則為枳」という話は同類の植物が淮河の兩岸に植えられると、品種に変化が生じることを言ったものである。変化の主な原因は温度であろう。

稲は温度に左右される農作物の一つである。年間平均気温の微妙な変化によって、稲の品種の変化は影響を受けやすいのである。1964年北京で行われた科学討論会で、丁類先生は雲南の稲作

栽培問題について興味深い報告を行った。彼が考えていることは、広西、雲南、貴州などの高原地域では、栽培される粳米には3000種もの品種があり、その地理的分布は籼米と異なっている。この点については、雲南の高原によって表現されている。雲南の農業科学研究所が1960年度の雲南省の籼米と粳米の垂直分布について行った調査に基づいて知り得ることは海拔1750m以下は籼米の分布地域であり、1750～2000mの間は籼米と粳米との混合地域であり、2000m以上は粳米の分布地域である。籼米の分布地域の年間平均気温はたいてい17℃以上であり、粳米の分布地域の年間平均気温はたいてい約16℃以下である⁽¹⁹⁾。竺可楨先生の推論に基づくと、この地域（揚子江下流および杭州湾地域を指す）は、当時の気温の方が現在より2℃位高い。すなわち当時の揚子江流域の気温は現在の珠江地域に近いものである。現在の考古学資料によってその推論は既に証明されたのであった。揚子江下流、杭州湾付近の河姆渡遺跡から出土した、今から7000年前の遺物について、その中の孢子の粉の分析を通して、以下の推測がなされた。「そこでは亜熱帯広葉樹林が生い茂っていた。主な樹木の種類はクスノキ、カエデ、クヌギ、ヌルデ、カシワギ、イヌブナなどで、森林の下に植被層が発達し、蕨類の植物が群生しており、ヒゲノカズラ、イワヒバ、アオネカズラ、ハナヤスリなどの草があり、木にはカニクサが巻き付いていた。カニクサは現在の、広東、台湾、マレーシア諸島、タイ、インド、ビルマなどの地域に分布している。以上は、当時の気候が現在よりも暖かいことを説明するものである。」⁽²⁰⁾ 揚子江下流および杭州湾一帯の現在の年間平均気温は約15℃である。仮に竺可楨先生の提唱する、新石器時代の気温が現在よりも2℃高いと考えるなら、その当時の平均気温は約17℃である。丁類先生の理論に従えば、こうした気候区は、籼米と粳米が併存し、籼米を主とする稲作の方式が形成されたのである。ある学者は以下のように考えている。我が国の籼米の栽培は普通の自生の稲からそのまま移り変わってきたのであり、後に籼米が伝播し、栽培される過程の中で気温の低い生態環境に適応するために、発育に変化と分化をきたした。そして粳米が生まれた⁽²¹⁾。朝鮮、日本では、粳米を盛んに生産するので有名なことではあるが、こうしたことに基づいて、多くの日本の学者は、日本の稲作文化の源流は中国東南沿海部ではなく、雲南およびアッサム地域にあるべきだと考えている。だから、日本の佐々木高明、渡部忠世、飯沼二郎、鳥越憲三郎などの学者は自分の学術的な関心を雲南にのぼしている。それは雲南から日本の稲作文化の源流を探すことを目的とするためであった。その近きを拾って遠きにつくという方法は、「稲作類型一致説」によって制限を受けていることは明白である。

筆者は以下のように考えている。いかなることも発展し変化するものであり、世の中には不変のものは一つもないであろう。朝鮮、日本の稲の品種は粳米類に属するものだけでも、それもまた中国東南に生まれたものに違いない。籼米の粳米への転化については、移動した後の気候の変化によって形成されてきたのである。こうした論拠は以下の二点である。

一、語音学上の理由。日本語では、稲を「イネ」と呼ぶが、元は呉語である。

『詩経・爾雅・釈草』によると、「稌、稲也。」とある。『説文』では、「稻」で「稌」を訓読して、「稌」で「稻」を訓読するため、稲と稌は同じものである。段氏の説に依拠すれば、稲と稌

という二字の他に「糯」という字が他にもある。許慎は「糯」に注を加えたとき、「沛国では稲を糯と称していたのだ。」と言っている。『谷梁伝』では、「稲」は「緩」の音と同一であり、「緩」の古音は「暖」と読むとある。段氏は「沛国謂稲曰糯」に注を加えて、こう書いている。「襄五年谷梁伝仲孫蔑衛孫林父会呉於善稻。呉謂善伊，謂稻緩。按謂善為伊者，古今韻也。謂稻為者，即沛国謂稻曰糯之理也。緩，古今又讀如暖。」つまり、呉越の人々は「善稻」を伊「暖」と呼んだ。それは日本語の「イネ」(yinei) 発音と全く同じである。解釈が必要なのは、「善稻」は粳米であり、善は良いという意味で、伊糯は良い稲、おいしいお米と理解される。つまり粳米である。これからわかるように、日本の稲作文化は雲南の山地に起源があるのではなく、中国の東南を起源としており、その産出地は呉越方言の地域である。伝播する以前、彼らは籼米を「伊糯」と称し、日本に伝わった後、「いね」は粳米にかわる名詞となったのだ。

韓国語にも類似している。韓国語の中で、米に混在している稲を「니」(ni) と読む。この言葉には恐らく二つの語源がある。その一つは糯である。段氏は、「沛国では稲を糯と言う。」と言っている。糯とniは音が似ていて通じる。沛は古代の東南にあった小国で、その朝鮮語のこの語彙は中国東南に起源があるだろう。二つ目は秈を指すというものである。『説文』には「稻今季落来季自生謂之秈，尼声。」そこから考えると、秈は自然の野生稲であることがわかる。今日の野生稲の調査結果から見ると、野生稲の分布範囲は25°以南の台湾・広東・広西・雲南省に集中している。しかしながら、我が国の、宋朝以前の文献に確かめられる記録では、揚子江下流域で野生稲が自生しているという記事が見られる。例えば、『国語』『越語』に「呉稻蟹不遺種」とあり、『三国志』『魏書・孫權伝』には「黄龍三年(231年)由拳野稻自生」とある。『宋書』『符瑞志』には、「元嘉二十三年(441年)，呉郡嘉興塩官県野稻自生三十許種」とあり、『南史』『梁本紀』には、「中大通三年(531年)，呉興生野稻，飢者頼焉」とある。『新唐書』『玄宗本紀』には「開元十九年(731年)楊州櫓稻生」とある。考古学に拠って、詳しく分析すると、上海崧沢遺跡の生土層から上層文化層(紀元前4000~3000年まで)の遺物の胞子の分析では、そこは亜熱帯の温暖湿潤気候であったことが明らかである。その遺跡の生土層の中から、少量の禾の本種の胞子粉が出土しているが、それは当時の野生稲の遺物であるかもしれない⁽²²⁾。こうして見ると、朝鮮語の中の「ni」は秈が語源であって、さらに東南の呉越方言地域で生まれたと言っても過言ではないであろう。

語音学者の周振鶴、游汝志先生の説明によると、我が国の南方には、「那」を「水田」の代わりに用いる稲作農業文化圏が分布している。(図6)それは東は福建から西は広西に至り、南はカンボジアまで、北は広西の北の境にまで広がり、広東、広西、雲南、ベトナム、ラオス、ビルマ、タイ北部などの広い範囲に分布している⁽²³⁾。ただその地域の原住民が越人の後裔であり、そして東南沿海部に集中していたことを考えると、朝鮮人が「水田」を「那」(non)と言うことも東南沿海部の稲作文化と関わっていたことがわかるのである。

朝鮮と中国東南の太古の文化の類似は、そのうえ稲の栽培方法および技術の点できわだって現れている。このことは後にひっくり返って「火耕水耨」と言われている。『史記』『貨殖列伝』には、

「楚越之地，地広人稀，飯稻羹魚，或水耕而水耨，果隋裸蛤，不待賈而足，地熱饒食，無飢饉之患，以故砦竄偷生，無积聚而多貧。是故江淮以南，無凍之人，又無千金之家」と記載されており、『漢書』『地理志』にも「江南地広，或火耕水耨」と記載されている。

「火耕水耨」とはいったい何を言うのであろうか。『史記』『貨殖列伝』の「集解」には応劭の言葉を引用して次のようにある。「焼草，下水種稻，草与稻生，高七八吋，四悉芟去。復下水灌之，草死，独稻長，所謂火耕水耨也。」張守節の解釈によると，「草を焼いた後，播種すると，苗は大きく成長し，草は小さくしか成長しない。水を流すと，草は死ぬけれども苗には被害を与えない。耨というのは刈草のことである。」と言っている⁽²⁴⁾。日本の学者西嶋定生氏もこう考えている。

「このような当時の江淮地方の稲作農業は，後世の江南稲作農業とは相違したものであつたに違いない。そこでこの時代の江淮地域の稲作農業の実態が問題になるのであるが，それはここに示された火耕水耨という農法を説明することにならない。（中略）そして，その結果，この火耕水耨という農法は，前年の枯草を火で焼き払い，そこに水稻を直播し，発芽後稲苗が七八寸に生長したときに雑草を刈り，水をそそいで雑草を枯死させる農法であつて，そこでは田植農法がまだ行われていないということが判明する。そしてこの火耕水耨という水稻栽培法は，この前漢時代にのみ行われた農法ではなくて，それ以後も継続して行われ，六世紀前半に著作された『済民要術』に示されている江南稲作農法も，基本的にはこの農法からそれほど発展したものではないことが判明するのである。」⁽²⁵⁾

これによると，太古の東南海岸の稲作居民の中に，確かに「火耕水耨」という方法が存在していたのだ。では，今の人々によって，我々はどのように科学的にその稲作文化を評価できるのだろうか。伝統的な歴史学界において，確かに一貫して「火耕水耨」を「刀耕火種」と同じものとし併列して，これを「原始的」な耕作文化だと見なしてきた人達がいる。しかし，その耕作文化が本当に後進的な文化であったのならば，進歩的な農業道具と豊富な稲作の生産量があったことを，どのように理解したらよいのであろうか。これは明らかに矛盾するものである。

実際には「火耕水耨」というこの稲作の耕作方法は，当時の当該地域の総生産力の水準と同じように，かなり先進的なものであった。その先進性は，「水」と「火」という二つのいくら取り尽くしてもなくならない自然環境を充分に運用し，そして開墾し，肥料をやり，除草し，虫の被害を防ぐという目的を達成し，大いに江南の土地が広くて人口が少ないという矛盾をゆっくりと解決したのである。

火耕は穀物栽培の準備段階である。処女地に対しては，火で雑草や木などを焼かなければならない。現代の民俗資料は，現在，南方の少数民族が開墾するのに，一般にまだこの方法を利用していることを明らかにしている。そのやり方は通常，前の年の秋に開墾する土地の大きな木を切り倒し，次の年の春に倒れた木が腐って枯れるのを待ち，その時火を放って燃やすのである。もし使っている途中の土地だったら，その年の春に，昨年収穫した後に残った穀物の茎や雑草などを水田に敷き詰めて直接燃やす。こうすると，焼き払った後の草の灰が水田を肥やすのみならず，焼いた後の水田の湿度が高くなり，土壌の組織が変化し，耕作するのに便利になり，同時にまた

火を放って田を焼くことは、水田の中の害虫の卵および雑草の種子などを焼き殺し、雑草と作物が水分や栄養などを取り争うこともふせげし、一挙に多くの利点を得ることができる。雑草、虫を取り除くと、続けてするのは水を田に引き、稲を作ることである。稲がある高さになると、引き続いて行うのは「中期除草」、つまり「水耨」である。水耨と言うのは中原地区の除草方法と異なる除草手段である。それは中原人が普通用いる手で草を刈って耕すやり方ではなくて、水で刈草することである。そうすると時間も労働力も省くことができるし、太古の東南地方の労働力不足という問題が解決できたのだ。それは、昔の東南地方の自然状況に適応した科学的な刈草方法であったのである。具体的な操作方法は、苗が7.0cm（7.8寸）位になるのを待ち、稲と高さが同じ雑草を耨除し、その後水を入れるのだが、これは雑草を水に浸すが苗には浸さないためである。こうすると、雑草および害虫を殺すと同時に、雑草を腐らせ、廃物が変化し宝となり、稲にとって肥料を加えることとなる。またこうも言える。それは耕作しながら除草し、肥料を施すという実にいい方法であるのだ。以上は良く言われている「火耕水耨」のことである。指摘できることは、科学的な耕作方法をしているということであり、それは古代に現れたのみならず、近代の中国東南稲作文化地域にもまた出てきていたということである。或説明によると、解放前には閩南の惠安という所では、当地では「火耕田」、又は「施緑肥」と呼ばれているこの種の伝統的耕作方法がまだ保存されていた。その耕作過程は以下の通りである。一、播種する前、まず水田の中の雑草を切り取ってしまい、同時にまだ残っている稲の根を掘り出して陽に当て、その後積み上げる。もし雑草が少なければ、他の所の雑草を集めて積み上げることが要求された。火を焚く前に、上に土をかけるのだが、それは「陰燃」（煙は出るが火は出ない）と言い、草灰をたくさん作る便のためであった。2、3日経つと、雑草は燃え尽きてしまい、水田の土も焼けて柔らかくなる。そこで、草灰を水田に敷き詰めて、田を耕し種を播く。稲苗がある高さに成長すると、除草し水を張って、雑草を水に浸して肥料を作る。雑草が足りない時には、他の所から雑草や木の葉などを取ってきて泥水に入れて腐らせ発酵させる。緑肥の使用は人畜肥の不足問題を解決するだけでなく、土壌組織も改変し、土が固くなることを防いだ。その方法は何千年も経っても衰えなかったが、それは長所があることを十分に説明できるであろう。

「火耕水耨」というのは、中国東南沿海部の太古の民族の独特の文化創造である。我々がこう言うわけは、その農業技術が東南沿海部の農業文化を紹介する古籍の中にのみ見られるからである。もちろん、我が国の多くの農耕民族、特にそれらの民族の太古の時代において、相次いで「刀耕火種」型のような原始農業が出現し、しかもそれらの文化が今に至るまで多くの少数民族の中に続いている。しかし、指摘すべきことは、「火耕水耨」と「刀耕火種」は全く違った概念であることである。「刀耕火種」とは「火耕」という点で、「火耕水耨」と同じである。つまり、ともに火を使って開墾し、また田を耕す前に雑草を焼く。そうであるけれども、前者の「水耨」は「水」を使って水田の中の雑草を水に浸し殺すもので、この方法は後者にはないものだ。表面的に見ると、両者とも操作のシステムの複雑な程度が同じでないというだけだが、本質的に考えてみると、それらが反映しているのは、その二つの農業の性格の違いなのである。又、こうも言える。すな

わち、稲作農業にこそ、「水耨」という操作システムがあったということである。その誕生は特別な地域や農業類型と関係があり、誰でもやれる、学べることではないのだ。これも我々が以上のように述べているところの、その耕作方法に強い地域の特徴を備えているという理由なのである。

興味深いのは、「火耕水耨」という、このはっきりとした特徴を持つ東南の地域文化は、にもかからず、乾燥、少雨の冀州平野をまたいで、東北地方の朝鮮民族の中にも見られるのである。朝鮮の典籍『農事直説』の中にその方面の史料が載せられている。

火耕は、「若新墾、草木茂密処、為水田者、火而耕之、三四年後、審其土性用糞。」とある。これはすなわち、水田を開墾し始める時、もし雑草が多いところでは、まず草を燃やさなければならず、その後に開墾し耕作すべきだということなのだ。それは一方では、雑草や樹木を取り除くため、もう一方では水田を肥えさせるためである。だから、著者が最後に言っているように、「三四年後、土の成分によって肥料を撒く。」のである。その言外の意味は、火耕した後に、草木の灰および腐植土の肥力は、2、3年位持続し問題にならないということなのだ。そうしてみると、火耕の作用およびその意義の理解に対し、朝鮮の人達と中国東南の沿岸地方の太古の民族とは全く同じということがわかるのである。

水耨は、「早稲秋収後、挾連水源肥膏水田耕之、冬月入糞、二月上旬、又耕之。以木斫（郷名は訖羅）縦横摩平。復以鉄齒擺（郷名は手愁音）打破土塊、今熟。先以稻種漬水、経三日漉出、納藁簍中（郷名は空石）、置温処、頻々開視、勿致鬱浥。芽長二分、均撒水田中、以板勞（郷名は𪔐地）或把勞（郷名は推介）覆種、灌水、驅鳥（苗が伸びる限り）。苗生二葉、則去水以手耕（弱い苗なら鋤が使用できないが、水が足りなかったり、土が固ければ、鋤にも使える）、去苗間細草訖、又灌水（水を流してから耕し、終わったらもう一回水を入れる。苗が弱い時は浅く耕すが、苗が強い時は深く耕す）如川水連通、雖旱不渴処、則每耕訖、決去水曝根、二日後、環灌水（乾燥と風を防ぐため）。苗長半尺許、又耕以鋤（苗が強いと鋤が使える）、耕時、以手掇軟苗間土面。耕至三四度、將熟去水。早稲善零、随熟随刈。」

朝鮮と中国東南沿海の農耕技術の共通するものは火耕、水耨の他、播種の方法にも表れている。前に引用した『農事直説』の原文の中で、我々は古代朝鮮人が稲を作るとき用いた方法、つまり、まず種を浸し、芽が20cm位になって、「均撒水田中、以板勞或把勞覆種、灌水、驅鳥」の直播法であることを既に見た。それは以後の秧苗を挿す方法とはまるきり異なったものであった。前述したように、韓国忠清南道大田付近で出土したあの青銅器の上に、男性が手を振り、鳥を追出す画が描かれていたが、地面に簍が置かれていた。今見ると、その画に描かれているのは、播種、驅鳥の場面である。それとともに、土をすき起こし、土地を平らに均す（土を砕く）などの画面が一緒に完璧な春耕図を構成している。それは古代朝鮮人が稲を植える時、利用したのは、直播きであり、移植栽培ではないことを再度証明するのだ。

朝鮮は、このようであるが、中国東南沿岸の稲作生産はまたどのような播種方法で行っていたのだろうか。西嶋定生先生は東南稲作文化についてこう語っている。「火耕水耨と言うのは、前

年に水田に残されていた枯草を火で燃やす。そして、稲を直接水田に播いて発芽を待って、青苗が70～80cm位になったら、雑草を刈り、水を入れて殺すところから見ると、当時はまだ育秧栽培法が行われていなかったことがわかる。」⁽²⁶⁾ すなわち、両者とも稲の栽培の中で利用されていた直播方式も完全に共通したものである。

いわゆる「鳥田」は、水棲の渡り鳥が春に水田の中の昆虫を捕食する習性を利用して行う稲作農業習俗である。

最も早いその稲作生産習俗の記録は、『越絶書』『越絶外伝記地伝』にあり、伝には「大越海濱之民、独以鳥田、大小有差、進退有行、草将自使、其故何也？曰、禹始也、優民救水至大越、上茅山、大会計、爵有德、封有功、更名茅山曰会稽。乃其王也、巡狩大越、見耆老、納詩書、審銓衡、平斗斛、因病亡死、葬会稽。葦椁桐棺、穿扞七尺、上無漏泄、下無積水、壇高山三尺、土階三等、延袤一畝。尚以為居之者樂、為之者苦、無以報民功、教民鳥田、……」とあり、『吳越春秋』『越王無余外伝』にも「堯崩……天下悉属禹也……鳳凰栖於樹、鑿鳥巢於側麒麟步於庭、百鳥佃於沢。……禹崩之後、衆端併去。天美禹德、而勞其功、使百鳥還民田」との記録があった。「鳥田」を除き、中国東南沿岸では、「雒田」や「象田」や「麋田」などが流行していたが、それらが「鳥田」と共に「四田」と言われていたのである。「雒田」の「雒」という字は『説文』の説明によると「鵠鵠」、つまり「小雁」である。『水経注』の卷三七では、『交州外域紀』を引用してこう言っている。「交趾、昔未有郡県之時、土地有雒田、其田從潮水上下、民墾食其田、因名為雒民、設雒王、雒将主諸郡県。」そこから見ると、「雒田」と「雁為民田」は同じく、「雒田」は「鳥田」であるということがわかる。

「鳥田」は中国東南沿岸太古稲作文化の特徴の一つであった。近年、東南沿岸の考古学の成果も漸々とそういう点を証明してきた。江蘇州六合県の春秋戦国時代の古墳で吳越文化の特徴を持つ副葬品が多数出土した。その中に、ある残銅の器の裏に軼稲作文化に関わっている「鳥田図」の絵が発見された。

その図の右側には、生長した稲の水田が刻まれている。水田の近所に、背中合わせの二人の農夫が体を曲げて秧を播いているようで、遠くの水田では、頭を上げて直立した四羽の長喙鳥が何かを探しているようである。画面の左前方には、大型の樓閣建築が一つあって、上下両層に分けていた。二階に長卓が置いてあったが、陶製の缶が二つ供えてあった。上下階にはそれぞれ三人が禾苗を持ってひざまずいていたようだ。陳龍先生の考察によれば、これこそが生き生きとした「鳥田図」である可能性が高い⁽²⁷⁾。(図7)

「鳥田図」から、我々が連想を禁じ得ない問題は、満漢などの早作農業民族の中で崇拜されていたのは、鳥、燕、鵲などの陸棲鳥類であるが、東南沿岸および歴史上そこから文化的連係のあった日本、朝鮮などの民族の中で、崇拜されていたものの多くは、鴨、雁、鶴などの水棲鳥類だったことである。朝鮮鳥杆の上にあった鳥類のデザインは、その点を証明できる。(図8) 日本の太古の銅鐸の上の鳥のデザインもその点を反復的に証明している。(図9) これは結局なぜなのか。それはつまりとどころどんな原始的觀念に源があるのか。どんな事実に基づいているの

だろうか。あいまいにトーテムであると解釈するのは簡単すぎるようである。我々から見てトーテムが全く無用なものであろうと、トーテムを信じている人々にとっては、必ず極めて実用的価値があるはずだ。もちろん、そのような価値も信仰の上での実用的価値をも含んでいる。では、鶴などの崇拜動物の実用的価値はいったいどこにあるのだろうか。いわゆる「天美禹徳、而勞其功、使百鳥還民田」のように創造されていた「鳥田」のことだろうか。

「鳥田」は一種の自然現象である。それは水棲の渡り鳥が、春になってから飛んでいき、秋になってから飛んで来るという特性を利用して、水田で食べさせて雑草の種子および虫の卵を除かせる農耕方法であるが、それは水棲の渡り鳥が冬を過ごす生息地だけに限定されている。東南沿岸の気候は温暖で、生態環境も良く、昔から常に渡り鳥の重要な越冬生息地であって、それは「鳥田」の産生に必要な物質的基礎を提供したのである。陳橋駅先生の会稽の「鳥田」という現象についての話によれば、「いわゆる会稽の鳥田は、実際には王充に「雁鴻」と称されていた渡り鳥の越冬過程のことである。この渡り鳥は今紹興の北側の泥沢平原に来る頃、ちょうど晩秋初冬になり、その時は既に穀物の収穫も済ませ、多数の渡り鳥が水田で雑草や虫などを食べるが、それはもちろん来年の春耕にとって、有利なことである。今日に至るまで、寧波紹興の平原は早くから開墾して耕地化し尽くしてしまった。ところが杭州湾両岸の海浜には、毎年そこに来て越冬する渡り鳥がまだ少なくないのである。王充の時代には、その平原はまだ大面積の未開墾の泥沢地があり、そこで越冬する渡り鳥は、数が多かったのである。」⁽²⁸⁾ 東南沿岸に比べると、朝鮮は北に位置し、寒冷な環境によって、越冬する渡り鳥の生息する地には成り得なかった。東南沿岸にいた古代の人々の子孫たちは、彼らの夢をその想像力によって木の叉で作られた木鴨、木雁、木鶴に託した。それを田の畦にさして「百鳥還為民田——百鳥還り民田を為す」という盛世を望み、それらの「谷霊」が新しい収穫をもたらすことを期待している。

「象田」、「麋田」の性質は、「鳥田」と大体同じである。象や麋が水草を好むことを利用して、水草を食べせると同時に草の根を踏ませた。それは除草に加えて、人の労力の軽減という利点がある。また鳥が田に糞を残したためにそれが水田の肥料となった。河姆渡等の遺跡から、麋、象などの骨が出土したことにより、「象田」、「麋田」の存在が架空のことではないのがわかる。

現在、鳥や象、麋などの動物を利用して田を踏ませる民俗はほとんど見られないが、鳥や牛に田を踏ませることは今も見ることができる。

この「踏耕」の方法は、その多くが排水のよくない銹水田あるいは山の中腹の冷水田で使われる。銹水田は低く水がたまりやすく、雑草も多く生える。冷水田は一年中寒いために、いずれも耕すのには不便である。家畜を利用して踏耕するしかない。一般的に3頭の牛や馬を一組にして、一人が紐を引いて牛馬を一列に並べて田を踏ませる。(図10) 家畜は牡と牝を同時に使うことを避けるが、それは性の制御をするためである。その粗放型の耕作技術はタイ、ベトナム、スリランカ、インド、マレーシア、フィリピン、インドネシア及び中国の南方において見られた。アジアにおいて、それは南方の稲作民族に特徴的である。

注意すべきは、それが南方文明として朝鮮や日本にも伝えられたことである。日本、とくに南

西諸島——例えば石垣島、与那国島、沖縄島、奄美大島、種子島などで、その古い耕作技術が使われていたという。日本の古籍書『成形図説』巻四「飼敷」に「若沼田（湿田）、則使牛馬入、反復踏踐、如是、則泥土實硬而、稲力倍增」と記されている。その挿し絵にも、当時の日本の踏耕労働の風景が生き生きと描かれている。（図11）私の友人の一人の話によると、朝鮮人は今なおその粗放な耕作技術を使う場合があるという。その主な原因は人出の不足、そして水田の環境の悪化である。

総じて言えば、朝鮮、日本及び中国南方の稲作文化は共通する所が多い。その源流をめぐる研究は朝鮮民族南來說の確立のために新たな視覚を提供してくれるに違いない。稲作信仰の比較研究において、朝鮮、日本及び中国東南沿海の稲作文化が同源であることは、また古代の稲作信仰からも窺える。周知のとおり、中国東南沿海の稲作民族、とくに河姆渡古代人との文化的つながりをより深く説明するために、ここで河姆渡から出土した稲作習俗に関連する鳥模様の図案を紹介したいと思う。朝鮮と中国東南沿海の稲作民族との古代における稲作信仰の共通性を分析してみよう。

河姆渡早期の遺跡から2つの陶盆が出土した。それには2組の興味深い鳥の模様が刻まれている。当初の報告には、その中の1組が魚藻模様で、もう1組が鳳鳥模様と断定されたとあるが、筆者はその2組の模様が全体の構成において同じで、いずれも鳥模様だと考えている。そのモチーフは雙鳥護禾と雙鳥享祭である。ひとつは2羽の鳥が向かい合って、その間のすくすくと育つ稲類植物に視線を注いでいる。いまひとつは2羽の鳥が向かい合っていて、その間の祭台に供え物が置かれている。その2羽の鳥は労働の成果を分かち合っているであろう。（図12）しかし、それがどのような民俗心理に基づいて生まれたのか、また当時の如何なる世相を反映しているのかについて十数年の間、学术界は満足できる解釈を与えていない。

7千年も前の神の筆先のような河姆渡鳥模様を前にして、誰もそのモチーフを明らかにできない状況にあった時、朝鮮族の鳥神崇拜の習俗が思わずその2組の鳥模様のモチーフに対して納得できる注釈を与えてくれたのである。朝鮮では鳥に神性があると信じられており、朝鮮の多くの地方では村の入り口か田の畦に鳥竿を立てる習俗が見られる。鳥竿は朝鮮では[Sottai]と呼ばれる。それは竿の先に木の叉で鳥の形に作るが、地方によってはその鳥の形が雁の場合や鶴だと思われる所もある。人々はそれを田の畦にさすことによって稲の苗を守ったり、豊作がもたらされると信じている。（図13）前章で朝鮮と中国の農具を比較したときに、韓国忠清南道で出土した春の耕作を表す青銅器を紹介したが、その青銅器のもう一つの面に2羽の鳥が枝に留まっている図案が刻まれているのである。（図14）それは当時の鳥竿を立てる習俗を描いた可能性が非常に高く、またその習俗は、かなり古いものであることがわかる。河姆渡で出土した雙鳥守禾図はその習俗のより古い記録だったのではないか。朝鮮の鳥竿を立てる習俗は中国東南沿海の河姆渡文化に由来するものだと考えられる。それは濊貊民族が北上したときに朝鮮へ持ち込んだもので、その歴史は少なくとも7千年はあろうと思われる。

より深く中朝文化の淵源関係を探るために、より視野を広げて日本の稲作信仰と中国の稲作信

仰の関連について検討していこう。

日本の学者、川添登は以下のように述べている。「近畿、中国地方には、縄文時代の末期からすでに南方系の民族が居住していた。彼らは縄文文化を持ちながら、稲作文化が渡来したために弥生文化を作り出した。一般的には稲作文化は韓国を経て南中国民族が伝えたとされる。」⁽²⁹⁾つまり日本の稲作文化は朝鮮のそれと同様に中国に出自し、したがって中国の稲作農業とは切っても切れない関係にあるのである。

中国、朝鮮の稲作民族の原始信仰と同じく日本民族も、鳥に神性があり稲の豊作をもたらすと信じている。日本の『近江風土記』によると日本ではヨーロッパと同じように白鳥が谷霊とされる。例えば『豊後風土記』に、ある豊かな農民が自分の豊かさを誇示するために餅を標的として矢の練習をする。しかし、突然餅が白鳥に変わって南へ飛んでいった、という記述がある。また、その年に空前の凶作があったとも記されている。『山城風土記』にもそれと非常に似た昔話がある。餅が白鳥に変わって飛んでいってから山頂にとまった。そのことによって、そこは「結稲」と呼ばれるようになり神社が建てられ、最初の稲荷神社になったという。川添登は次のように述べている。「日本人が言う白鳥は通常鶴を指す。現在も日本各地で鶴が稲の穂をくわえて飛び、その穂を落とせばそこが豊作になるという昔話がよく聞かれる。伊勢神宮の神官は鎌倉時代にすでに有名であった。いわゆる神道五部書の一部の『倭姫命世記』に真名鶴が稲の穂を伊雑に銜え、一粒から千粒が実った。そのことによって、鶴は大年神として内宮の末社神伊雑宮に祀られている。」⁽³⁰⁾中国、日本、朝鮮の出土物には多くの鶴鳥の姿があり、それらの鶴鳥が常に稲の苗、水田と一緒に描かれていた。

ここで、朝鮮での祭鳥習俗と河姆渡に出土した「雙鳥享祭紋」についてみていくことにする。

朝鮮では上元節に鳥を祀る習俗が残っている。上元節の日は人々が餅米でご飯を作る。まず蒸して、それから油、蜂蜜、醬、棗、粟などをいれて混ぜ合わせて赤味を出す。それ故に赤飯または薬飯とも呼ばれる。『朝鮮実紀』の「上元紀俗条」に下記のような詩がある。「薬飯蒸紅爛似霞、輕調軟蜜白于花。東京遺俗伝来久、祭廟如今不祭鳥」その詩によれば、赤飯を作るのは、鳥を祀るためである。歴史書には、「新羅炤智王上元幸天泉寺得鳥啣書、開之、視書曰：射匣王入宮，射之，匣中有人，乃内殿焚修僧乱宮者也。自是国俗每于是日以糯米飯祭鳥，薬飯之設，始比，今則用以力祭祀，賓客之需」とある。筆者はその風俗が霊鳥が書を銜えてきて王を救った話しが由来したという解説は、明らかにその後だと考えている。最初は直接、神鳥が稲を守るという稲作民族の信仰と深く関わっていた。河姆渡で出土した雙鳥享祭の模様はその風俗の最も原始的な記録かもしれない。朝鮮の祭鳥民俗は中国東南からその源を発したと思われる。

ちなみに、赤飯を食べる習俗は日本及び中国西南地方にもかなり広く分布するが、一般的に餅米を小豆と一緒に煮込んだものが多い。

3 飲食習俗 — 朝鮮食卓における南国情緒 —

朝鮮族は飲食習慣において明確な特色を示す。それは飲食の内容や、食事の方法だけでなく、調理用具にも表れている。それらすべては中国東北地方に長く居住していた他の古い民族とは非常に異なり、逆に南方の飲食習俗に頗る近い。それゆえに、この民族の飲食文化の源泉について再考する必要があるのである。そしてそのルーツはいったい何処にあるのだろうか。

飲食の形態は生産の様式によって決定される。古い中国の諺に「瓜を植えれば瓜を得て、豆を植えれば豆を得る」、「山に近ければ山（のもの）を食べ、水に近ければ水（のもの）を食べる」という言葉もある。生産の様式は飲食の形態を制約し、生産習俗は飲食習俗を制限している。一方、飲食習慣がいったん定着すると、逆に生産に影響を与える。影響・関与・制限しあった結果、生産と飲食文化との間には一定の循環の形態が構成され、ひとつの小宇宙となる。ひとつの民族の飲食文化もここで形成されることになる。

北方の朝鮮族について言えば、彼らは北方の他の民族に比べてユニークな特色を持っている。それは農業、とくに稲作生産の中に見いだされる。

一般に朝鮮族は米を主食とする。それに対して北方の他の民族は粟、小麦及びコウリャン、大豆などの雑穀を主食とする。朝鮮は北方に位置するが、この地方の稲は成長期が長いために、粒が大きいばかりでなく、香が良く味も良い。この稲は粳米の一種に属し、この粳米は朝鮮族の主食であると同時に太陽や神を祀るための供物ともされる。したがって、朝鮮族にとって粳米は重要な作物である。

しかし朝鮮人は粳米よりはむしろ糯米を好む。実際に糯米は生産高は高くないが、寒さと日照りに強く、芒（ノギ）が高く堅いために鳥やその他の動物の害を受けにくい。また干す場合に粳が落ちにくいのである。その上、糯米は炊いた後でも腐りにくいため、食べる度ごとに加熱する必要がない。以上のように糯米は朝鮮人の冷食の習俗に適しているのである。朝鮮人は糯米を非常に珍重しており、重要な祭日或いは結婚、葬式がある度に糯米で多くの「赤飯」や餅を作るのである。それを以て神と祖先を祀る。彼らにとって、それは最も神聖な供物である。赤飯の作り方は様々だが、複雑なものはハチミツ、ナツメ、味噌、あずきなどを入れて赤い色を出す。簡単なものは直接あずきと糯米を炊き合わせる。この調理法は中国西南の少数民族のものとはほぼ同じである。打糕、切糕、片糕などがある。その中で、打糕に最も伝統的な特色が見られる。その製造過程は、まず糯米を浸し炊いた後に、木槽か石の臼に入れる。そして、木製もしくは石製のかなづちや杵を使って一定のリズムで挽き碎いて、糯米が粘性の強くなるまでつき合わせる。その後取り出して熱いうちに小さく千切り丸い餅の形にする。打糕は中国南西部から朝鮮半島、日本列島までの狭く長い地域に分布する飲食文化である⁽³¹⁾。3つの地域の打糕の材料、加工のプロセスからみると、それは源を同じくすると考えてよいであろう。

朝鮮の食卓での主な副食は漬物である。その味は生（ナマ）、酸味、冷たい、辛味（生酸冷辣）が特色である。朝鮮人が調理する刺身、生肉のスライス、酸辣子（酸唐辛子）、酸辣白菜のいずれにしろ、上記の要素を含んでいる。その調理法は西南民族にはごく普通に見られるが、北方民族には見るできないものであろう。

調理法から見れば朝鮮の漬物は発酵型文化に属する。この文化は今も西南少数民族の食文化に根強く残っている。百越民族の中の壮（チワン）族、白（ペイ）族、侗（トン）族、瑶（ヤオ）族などに見られる腌魚（魚の塩漬け）、泡菜（野菜の漬物）などの味は朝鮮民族に類似するところが多い。それは上記の諸民族が古くから同じ東南地方に居住し、影響しあった結果かもしれない。専門家の分析によると発酵文化の発生は、その多くが塩の使用法、あるいはその存在の知識の有無に依るといわれている。醬（みそ）を含む調味料は当時の人々が、まだ塩の使用法について無知であった事実起因すると言わねばならない。今日我々がよく目にする日本人、朝鮮人、及び中国南西部のいくつかの民族のみそスープは、この飲食習慣の名残であろう。

また、もうひとつの特色ある朝鮮人の食事習俗として唐辛子の使用をあげることができる。これは中国北方にいる他の民族と異なるのみならず、比較的類似する日本とも違うのである。朝鮮語では「唐辛子」といわれ、発音が日本語と同じである。ある日本の学者は、唐辛子が中国から日本を経由して朝鮮に伝わったことを認めており、またその伝播の時期が唐の時代だったと述べている。

朝鮮人が辛いものを好むことを最初に記した文献『増補山林経済』は、17,8世紀頃のものである。ある学者達によれば、朝鮮人が辛いものを好むというのは歴史的にはかなり浅く、唐辛子の呼び方から見ても、その時期は17,8世紀前後であると推測され、唐代より古いものではないと考えられる。しかしながら、別の可能性も考えうる。その理由は、唐辛子が伝来する以前に、また伝来した後も、朝鮮人がずっと朝鮮半島に原産の野性植物——山椒を食べていたのではないかと考えることも可能だからである。山椒を食べる歴史は太古まで遡ることができるかもしれない。山椒は常緑ミカン科の植物で、朝鮮半島の咸鏡南道から黄海南北道の南部に至る広範囲にわたって分布している。山椒の種は乾燥・保存できるために、自生しない地域に移植することもまた可能である。したがって、山椒は朝鮮半島において非常に古い伝統的調味料として全朝鮮人社会に好まれている。唐辛子が朝鮮半島に伝わってからも山椒は広く使用されている。その理由は山椒が唐辛子よりもさらに辛いところにあるのかもしれない。17世紀に世に問うた朝鮮人の飲食大全『飲食知味方』と18世紀に書かれた『増補山林経済』等の文献に依拠すれば、朝鮮の辛い調味料は唐辛子を使用していたのではなく、山椒を使用していたのである。これらの文献のなかでは「川椒」とも記載されており、中国華南一帯の表記法と一致している。中国の植物学者、李璠は以下のように述べている。「現在、我が国で栽培されている唐辛子の品種の多くは南アメリカから伝えられたのであるが、我が国の南方と熱帯地域にも原生の野生唐辛子が分布している。云南の西双版纳、恩茅、瀾滄あたりに一種の『涮辣椒』が分布している。一年草で、小さく実が丸い。もう一種『小米辣』があり、多年草の『辣椒木』である。それらの野生唐辛子は辛さが強く、古くから採集されている。このように新古両大陸に唐辛子の原生植物が分布しているのがわかる。ただ南アメリカの原生の唐辛子が早くから栽培化され、品種化されていたのに対して、アジアの野生唐辛子は長い間野生で採集されるのに留まっていたのである。」⁽³²⁾

朝鮮人の唐辛子に対する呼称（川椒）が華南と同じであることと、中国の東南沿岸地域の古代

の温度が現在よりも2℃高く現在の気温に近いことから考えると、太古の東南沿岸地域にも山椒が存在していた可能性が高い。朝鮮族が唐辛子を食べる習俗は獮貊人の北上によってそれと伴に伝えられたのではないかと考えられよう。

このほか、朝鮮族が辣醬（辛いみそ）を好むという習慣がある。辣醬の原料は北方でよく使用される大豆ではなく米である。その醸造過程は、まず米を挽いて蒸し、できた醬に麦芽粉、唐辛子粉を加えて混ぜ合わせ、瓶に入れて発酵・成熟させる。現在でも農村ではこうした手作業が見られる。朝鮮族の辣醬の製造過程に見られる技術、使用される原料及び辣醬自体のもつ特色などを見ると、それは南方民族に酷似している。以上のことから、朝鮮文化と南方文化との類似関係と稲作民族の飲食の特徴を指摘することができる。

辛いものを食べる習慣と稲作文化は同一の源泉から発し、かつ併存する文化現象であり、稲作民族が皆干欄式建築の家に住むのと同様に、その必然性を見出すことができる。稲作の労働を経験した人にはわかりやすいだろうが、水田での作業は毎日水に浸からなければならないために、体内の湿気が大きくなる。漢方医学の陰陽理論で言うと、時間が長くとれば陰が強く陽が衰え、胃寒胃痛、胃腸が張る、消化不良、及びリュウマチ等の症状を引き起こす。加えて稲作民族に冷食が多いために、辛いものを多く食べて陰を抑え陽を強くして、陰陽のバランスをとるのである。唐辛子は性が熱いために、胃の寒気を追い出し、胃腸の張りやリュウマチの解消に効果がある。こういった理由から中国南方の稲作民族である白族、壮族、侗族、また東北唯一の稲作民族である朝鮮族にも唐辛子を食べる習慣がある。むろん稲作民族が全て辛いものを食べるとはいっても、その調理法には各々違いが見られる。同じ稲作文化をもつ日本では唐辛子を食べることが少なく「山葵」と呼ばれる水生植物で寒気を追い出すのである。

朝鮮族には、また糯米で濁酒を作る習俗がある。この米酒は北方の他の民族が醸造する強い雑穀酒とは異なり、度数が低く一般には20～30度しかない。すっきりとした喉ごしで、甘さに僅かな渋みがある。これは南方の少数民族が自製する糯米酒と酷似している。また製造の技術もかなり類似するが、これは東北の民族にはあまり見られないのである。

朝鮮族の飲食習俗について彼らの炊事道具―釜を見ていくことにしたい。というのは、釜が朝鮮民族南來說に重要な示唆を与えてくれるであろうからである。

東アジアの鍋は主に3種類ある。まず一つは鼎（鬲）である。この炊事道具は3本の足で火の上に乘せて食物を煮る。古代の中原地区に広く見られたものである。いま一つは耳吊鍋である。耳のような把手で火の上に吊して食物を煮る。その鍋は中国の多くの周辺少数民族に現在も残っており、朝鮮や日本の食文化に影響を与えた。最後は暖底敞口鍋（底が平らで口が大きい鍋）、それは竈で使用されていたが、現在もなお使用されている。しかし、これから紹介する朝鮮（日本を含めて）の釜鍋はその形態も使用法も上記の3種類の鍋とは明らかに異なる。朝鮮の伝統的な釜鍋は筒状で底が丸く胴の周りに突きだした部分があり、そこがあたかも翼のような形であるために「羽釜」と呼ばれている。

古くは日本の「羽釜」は金属性ではなく陶製であった。（図15）金属器が使用されるのは古墳時

代以降である。それは考古学的資料によって裏付けられている⁽³³⁾。朝鮮で出土した「羽釜」は鉄製である。(図16)その釜は遅くとも高麗時代にはすでに広く使用されていた。それ以前にさらに古い陶製の「羽釜」があったか否かは、残念ながら中韓両国の学術交流の進展に期待するばかりではない。ただ、高麗時代の羽釜の製造技術などから考えて、それ以前にも陶製の羽釜があった可能性は高く、またその歴史はかなり長かったのかもしれない。

朝鮮と日本で古代に使われた羽釜の造形及び製造の技術から見れば、その源泉は同一だと考えられよう。しかし、その文化の源はいったい何処にあり、それはどのようにして伝えられたのであろうか。現代中国の考古学の成果は以下のような結論を出している。その文化は中国の東南沿岸地域の、朝鮮族の祖先——「東南夷」と呼ばれる濊貊族に源を発する。現在その文化の中心は正式に余姚河姆渡文化と命名された。

河姆渡文化の遺跡は1973年7月に発掘された。その時、朝鮮・日本文化に非常に近い稲作遺物が出土し、また高床式建築が出土した。さらに、その形態が朝鮮や日本の「羽釜」に非常に類似した脊のある陶製釜(図17)も多く出土した。その作られた時期は、1000年～5000年前である。その脊のある陶釜は主に遺跡の第3層と第4層から出土した。その形は一般に腹部がかなり深く、中上部に明確に脊のある突起物が見られる。圖底は比較的尖っている。専門家の分析によれば、その脊のある釜は、その周辺に位置する歴史が100年ほど古い侗郷の羅家角文化に源を発するといふ。そしてその後、河姆渡文化は太湖沿岸にある馬家浜文化に影響を及ぼした。出土品から考えれば羅家角、河姆渡及び馬家浜の3つの文化は互いに関連性が深いといえよう。(図18)いずれも鏢があるのが特徴で、これらの文化が中国東南羽釜文化圏を形成しているのである。また羅家角または馬家浜よりも河姆渡を朝鮮や日本の「羽釜」の発現地とする理由は、高床式建築などの文化要素をもつ河姆渡文化がより朝鮮や日本の文化に近いからである。

北京大学の炭素-14測定によると、脊のある釜の成立は、最大紀元前5090±73（今から7000年余前）、最小紀元前3230±140年（今から5000年余前）であるという。その後の脊のある釜の発展の軌跡の詳細は不明である。ただ、それが異民族の侵入或いは民族の大移動と関わりが深いとは考えられる。「羽釜」がその時期に朝鮮に伝わり、また日本に入った確実な証拠はないが、濊貊人が居住していた吉林の西团山遺跡から出土した脊のある「羽鉢」と、韓国扶餘邑北里から出土した陶製の脊のある「羽碗」は東南濊貊族の羽器文化が北上した可能性を暗示している。それは我々に大胆かつ鮮明な結論を導かしむるのである。

4 朝鮮の住宅 — 高床建築文化の研究

中国の東北三省、特に吉林省周辺には朝鮮人が多く住んでいる。その朝鮮族は漢族化の一途を歩んでいる。衣食住の側面において、それは特に表れている。住宅が国家によって統一的に設計、建築され、ひいては住宅の一体化や単一化を招いたのである。我々は朝鮮族の住宅の民俗的な個性を探ろうとする場合、少し都市化された住宅を離れ、農村に目を向け、朝鮮族の伝統的な住宅

の形態を見てみる必要があろう。

伝統的な朝鮮族の住宅はその多くが平屋で、漢族を含む東北の他の民族と大きな差異はない。相違点と言え、屋根が2つの斜面を合わせたものではなく、4つの大きな斜面から成っている点である。その上に稲藁が敷いてあり、降水量の比較的多い韓国の住宅には、前面の軒端が前方に突き出ており、雨を防ぐ回廊が構成されている。(図21)

住宅の建築は人類が長い年月をかけて造り上げた自然の認識の結果である。その様式、造形は、宗教的な影響を除けば、主にその地域の自然環境に適応するように設計され、建てられている。東北は雪が多いため、積もった雪が屋根に与える圧力を減らす目的から、屋根の傾斜をなるべく急にするように設計されている。華北は雨や雪が少ないため、屋根の斜面もより穏やかである。地域によっては、屋根をアーチ型にする場合もある。西北は乾燥地帯に属するので、人々は平らな屋根の家に住むことが多い。南方は雨が多いので、屋根の斜面が華北より急で、軒もより長い。そうすることによって、屋根に水が溜まるのを防ぎ、壁を圧迫することもない。出土した物から見ると、南方の古代の住居は、両側斜面が結合した物である。(図22) 軒が長いために、前後の壁が受ける圧力は少ない。しかし、左右の壁を覆う物がいないために、常に雨の被害を受けることになる。その欠点を補うために、梁が長くとりられ、屋根の棟が両側につきだされている。その上に稲藁をかぶせ、壁を保護している。日本で出土した銅鐸の図案を見ると、弥生時代の日本にも上記のように長い梁があり、屋根の棟が両側につきだされている高床式建築が使用されていたことがわかる。こう考えれば、住宅が両斜面の屋根の建築から四斜面の屋根の建築へと発展したと言えよう。中国東南沿岸の浙江紹興306号墓で出土した銅屋模型は典型的な四斜面屋根形式の建築である。朝鮮の四斜面屋根形式の建築構想が、そこに源を発していると考えられる。

周知の通り、漢字の「雨」の造形が建築に関連している。甲骨文字は「南」を𠂔、𠂔、𠂔、𠂔、𠂔、𠂔、𠂔などの形と書く。金文は、𠂔、𠂔、𠂔、𠂔などを書く。「南」は象形文字である。その形態は南方の太古の干欄式建築である。字を作った人にとって、南方の干欄式建築は独特な風格があり、南方文化を代表するに足るものとして映ったのだろう。したがって、それをもって南方を指す。干欄式建築とは地面に杭を打って柱を立て、柱の上に家を建てる建築様式である。それは床が地面から離れているため、高床式建築とも呼ばれている。

字形から分析すると、遠い昔の干欄式建築は最初は屋根が稲藁に覆われていて、また稲藁が風に吹き飛ばされないように屋根の棟の所に「千木」を交差して据え付けた可能性が高い。その方法は現在も、西南少数民族文化の中に保存されている。多くの朝鮮・日本の伝統建築の屋根の棟に交差する装飾物「千木」は古代の干木架の名残である。

甲骨文字の字形から見ると、太古の干欄式建築の上には人が住んでいるが、下は利用されていなかったようである。しかし、現在なお残っている干欄式建築の多くは上には人が住んでおり、下には鶏、豚、犬、牛などの家畜が飼われている。それは原始飼育業の興りに関係があるかもしれない。もちろん例外もあるが、例えば白族の地区においては、人が下に住み、上には食料などを置く。地面の近くは湿気が多いために、地面から1、2尺(1m=3尺)離れる所に床を敷い

て、うまく湿気の問題を解決している。朝鮮人の防湿問題への対処方法が白族に類似している。

「南」という字の字形から見ると、最初の干欄式建築は木によって建てられたのがわかる。その字の中心を木の形のものが貫いている。それは史料の中の「僚者、……依樹積木、以居其上、名曰干欄。」の記載と一致している⁽³⁴⁾。干欄式建築には二つの長所がある。一つは周去非が『嶺外代答』の中で、「考其所以然、蓋地多虎狼、不如是、則人畜皆不得安。」と述べているように、干欄式建築は防衛の目的から考案されたと考えられる。つまり、人が上に居るために、猛獣によって命を落とすことがないばかりでなく、下にいる家畜も人間の手によって守られる。何かあれば、人が出て猛獣を追い払うことができる。まさに一石二鳥である。広西で、私は池の中に建てられた干欄式建築を見たことがある。家屋と陸地との間に木の橋が架かっている。その原始的構想を推測すれば、防衛と関係があろう。もし橋を吊り橋に変えたら、何者も侵入できない。もちろん、もう一つの長所もある。西南地方の多くの池では魚が飼われている。家屋を池の上に建てれば、上の便所から排泄された糞尿によって直に魚を飼うことができる。それは飼料の問題を解決し、環境も美化する、まことに賢い考え方である。日本では便所のことを「川家」とも書く。その意味は川の上の小屋である。古代の日本では便所を水面に建てていた。『万葉集』巻十六のある歌に、ある人が婦人を罵る言葉に彼女が糞を食べた魚のようだとある。日本では便所を水面に建てるのはそもそも糞便で魚を飼うためであったのである。日本が西南の多くの少数民族と同源同祖であると言われるのも理解されよう。

いま一つは、干欄式建築が衛生上の必要性から生じた点である。甲骨文字からわかるように、古代人は皮膚病の発病率が非常に高い。それは南方も北方も同様である。その原因は、南方は暑く湿度が高いためであり、また北方は長期的に穴居することによる。その問題を解決するために、北方ではオンドルが発明され、南方では干欄が生まれた。そうして人と湿気のある地面との接触の機会を少なくし、皮膚病の発病率を減少させたのである。

ここ数十年来、漢文化が少数民族文化に対して影響を及ぼすに従い、南方の少数民族の建築も変化しつつある。高床式建築から低床式建築へ、竹木建築からレンガ造りの建築へと移行することが基本的な流れとなっている。家屋の高さは変わらないが、上に人は住まず、物を置くようになった。下の居室の湿気を防ぐために地面から一尺半離れた所に床を敷く、この建築は一見、高床式建築からの落地式建築に変化したように見えるが、その実態は高床式建築に属する。異なる点と言えば、高床式建築の床を2 mから一尺半にただけである。したがって、それは高床式建築の一種だとも考えられる。その建築は高床式建築における防湿の長所を受け継いだと同時に高床式建築における昇り降りの不便さを改善した。それは高床式建築の発展における歴史的な進歩と言わねばならない。

南方の少数民族の干欄式建築の特徴およびその発展過程を見てきたが、また戻って朝鮮族の住宅およびその付属施設の建築を見ていくことにしたい。その中に南方干欄式建築の特色を見出すことができる。朝鮮族の住宅が干欄式建築から現在の底床式住宅への発展過程をより理解するために、まず朝鮮族の住宅の補完的設備―倉庫から見ていこう。

朝鮮族の建築には非常に興味深い点がある。それはどんな家でも、住宅を建てると同時に必ず食料や物を置く倉庫を建てることである。土地の人々は、それを「倉房」と称す。その倉庫は北方の漢族の倉庫とは異なる。漢族の倉庫が接地式であるのに対して、朝鮮族の倉庫は高床式である。(図23) その建築様式は南方の干欄式建築とほぼ同じである。違うのは、ただ規模が小さい点である。それを建てる場合、まず深い穴を4つから6つ掘って、順に4本から6本の柱を立てる。柱には2 mの高さの所にほぞ穴があけてあり、そこから上下の梁をほぞ穴に打ち入れて、また板や木の皮で床と壁を作る。最後に苫草で屋根を覆う。風で草が落ちないように、屋根の棟に「千木組」を交差して置くことが多い。その倉庫の造形は側面から見れば甲骨文字の「南」の形に非常に近い。それは南方の干欄式建築と同じ源に発すると考えても良いのではなかろうか。

私は朝鮮族の住宅の最初の形態は現在の干欄式倉庫と同じく高床式建築ではないかと考えている。ただ、朝鮮民族が北上して以後、北方は寒いために、干欄式建築にレンガを用いなかった。あんぺらと板で作られた壁は北方の厳しい風雪を防ぐのには不十分だったのである。また北方では南方ほどに水害が多くないので、家屋をそんなに高く建てる必要がない。それ故に、朝鮮族が北に移動してから、すぐにその伝統的な干欄式建築の方法を放棄したのかもしれない。ただ通気や除湿が必要であり、かつ寒くても構わない倉庫の形態の中に古い形が残されており、それが朝鮮族南來說の有力な根拠となっている。

現実と伝統とが接触する時、人々は伝統文化と決裂しようと考えやすい。実は人と伝統、現実と伝統の間には重要な関係性がある。それを切ることは自分の命脈を切るに等しく、そう考えれば、現実には伝統に基づいていると言えよう。より高い現実との相続でなければならない。北上した朝鮮族は自らの伝統的な高床式建築が北方の気候に不適応だという理由から、高床式建築を否定したのではない。そうではなく、高床式建築の長短所を分析し、長所を生かすと同時に短所を克服して、高床式建築から低床式建築への生まれ変わりを果たし、高床式建築の二次的文化(亜文化)を生み出したのである。高床式建築の二次的文化(亜文化)－低床式建築は現在に生きる朝鮮族の伝統的住宅である。

朝鮮の住宅、特に韓国の住宅は日本の住宅に非常に類似している。日本の住宅は沖縄にその源を発すると主張する日本の学者もいる。それは一般に軒が外に2～3 m突き出ている、下に雨を防ぐ廊下がある。廊下は木の板で作られた高さ1尺、幅1 m位の長い台である。日本では「縁」と呼ばれる。中国の南方では「晒台」という。日常的に人々がここに座り、手仕事をしたり、涼んだりしたりする。そこは屋内と屋外の間の中間の空間でもある。入る時にはここで靴を脱ぐ。縁の内側には幾つかの障子があり、それは同時に入り口でもある。朝鮮の住宅には専用の入り口がないためである。屋内の高さは縁と同じで、同様に木の板を敷いたもので、それは「床」と呼ばれる。床と地面との間に1～2尺の間があり、防湿の機能を果たしている。畳をその上に敷いて、その上に寝る。その建築は干欄式建築とは呼ばれないが、確かに高床式建築の一様式である。伝統的な高床式建築と比較して、床の高さの違いだけである。本来の床は高さが2 mだが、今のはそれが1尺半の高さである。しかし、それは東北の一般的な平屋と本質的に異なる。後者はオ

ンドルがない以前は寒くて湿っぽい地面に寝るほかないが、前者は人が床の上に寝ることができて、睡眠の環境が改善された。

朝鮮式の住宅が干欄式建築から変化したと考えるのには、言語学上の根拠もある。多くの場合、一般的な平屋においては、来客があった場合に、「入って下さい」（請進）と言うが、それに対して、朝鮮、日本および中国西南に至る干欄式住宅に住んでいた民族は「請上来」と言う。日本語では「あがってください」、朝鮮語では「올라오십시오」である。これらの事例からもわかるように、これらの民族はかつては干欄式住宅に住んでいたことがわかる。居住環境が変わった後も、古い言葉が残され保存されてきたのである。

高床式建築から変容した低床式の朝鮮建築は民族の北上に伴い、絶えず変化してきた。最も大きな変化は床の木の板からオンドルへの移行である。オンドルの最初の考案者は不明であるが、北方民族の手によるものであることは間違いないだろう。オンドルは寝る場合の湿気と寒さに対するために作り出されたと考えられる。それらは陶器を焼く場合、竈の上部が暖くなる現象に啓発されたのかもしれない。古い瀬戸物の竈は自然の土斜面を利用していた。坂の断面から奥に掘って、竈本体と煙突を作る。使用時は下から火をつけて、熱い気流を竈本体に流入させ、最後に煙突を通して排出させる。その構造は東北、特に東北の朝鮮族のオンドルに酷似している。北方の漢族の家では、竈の高さはオンドルの高さと同様である。火が竈を通してオンドルに入り、屋根の高い煙突から排出する。朝鮮族の方はやや異なる。朝鮮族のオンドルは床であり、竈は地下の穴に設けられている。オンドルの平面が竈よりも0.5mほど高い。竈の炕の構造は酷似している。火が竈からオンドルに入る。煙がオンドルからでてから、直に屋根の煙突にはいるのではなく、一定の距離の「地下通路」をってから、家から3～5mほど離れた空き地にある煙突から排出される。それはオンドルの最も原始的な形態ではないだろうか。

オンドルがいつ生まれたのかは不明であるが、遅くとも黄帝時代よりも古くはないであろう。私の知る限り、「炕（オンドル）」の文字が、最も早く使用されている史料は苗族の史詩『尋找木鼓』である。史詩に以下のようにある。「走到竹子山，炕見了五個竹園，六片竹林栽在遠古，臘栽它干什麼呢？栽它為了編炕簍。平時炕稻穀，十二年過後，拿來炕祭谷，搗巴々祭祖。」⁽³⁵⁾

苗族は現在中国の西南に住んでいる。しかし、かつては確かに中国の北方に住んでいたことは、神話の中の「黄帝与蚩尤戰于冀州之地」という一文の中にもうかがえる。苗族のオンドルは南下後の成立ではなく、北方の厳しい自然環境に適応するように造られた北方文化である。つまり、黄帝と蚩尤が冀州の野に合戦した時に、苗族はすでにオンドルを使用していた。前述したように、太古の時代、朝鮮族と苗族が共に渤海北岸に住み、隣り合いながら、高度な古代文明を形成していた。誰が最初にオンドルを作ったかはともかく、苗族が当時すでにオンドルを使用していたのは確かである。文化伝承の側面から見れば、その近隣の古朝鮮人がオンドルを使った歴史も短いものではないだろう。韓国の考古資料から見ても、朝鮮はかなり早い時期にオンドルを使用していた民族の一つである。李元淳、崔柄憲、韓永愚が著した『韓国史』によると、紀元前1800年頃、朝鮮人の祖先がすでにオンドルの使用法を知っていたという。

これまで朝鮮の住居の発展の軌跡をおおざっぱに検討してみたが、その結論は以下の通りである。北方に近い朝鮮族のオンドル式建築が低床式にその源を発し、伝統的な朝鮮族の低床式建築がまた太古の南方の高床式建築に源を発した。朝鮮族が北上してから、高床式建築が北方の厳しい寒さに耐えられなくなったために、他の形態に変化せざるをえなかった。その結果、彼らは低床式建築の住居に住むようになった。低床式建築は一見、北方の伝統的平屋と類似しているが、本質的には高床式建築の変形である。その存在によって、有史以前の朝鮮族が確かに干欄式建築に住んでいた民族であることが明らかになるのである。

朝鮮の低床式建築が中国南方の高床式建築文化にその源を発すると述べたが、ではその「南方」とは一体どこに限定すればよいのだろうか。浙江、江蘇、それとも山東か。それを明らかにする必要がある。それはその民族のルーツ、民族構成およびトーテム崇拜などの問題と深く関わりを持つ。

その問題を検討する前に、日本の東京大学文学部の飯倉照平教授による中国の民話「老虎外婆」（虎おばあちゃん）の研究を紹介したい。「老虎外婆」は中国では良く知られている昔話である。飯倉によると、この昔話の結末部分は大きく二つのタイプに分けられるという。その一つは、遭難しそうになった子供が口実をつけて門外に脱出し、大きな木に登ったために助かったという型である。今一つは、子供たちが機会に乗じて、2階に上がり、危険から逃れたという型である。飯倉は、前者は主に淮河以北に分布しているのに対して、後者は淮河以南に分布していると指摘している。昔話は現実の生活の反映でもあり得る。淮河以南の「老虎外婆」の結末部分に子供たちが2階へ登り助かるという内容から、我々は遠い古代の淮河以南の人々が干欄建築に住む習俗があったという事実を理解するのである。

中国の考古学の成果も淮河以南が、中国の干欄式建築文化が盛んな地帯であったことを示している。干欄式建築の遺跡が江蘇、浙江、福建、江西、広東、広西、雲南、四川などの各省で発見された。その中でも、東南沿海の浙江省河姆渡文化遺跡は代表的なものである。その構成は、横の柱と縦の柱（円柱、方柱と柏柱を含む）からなる地龍骨を中心に、その他の縦の板と横の板などである。遺跡の室内部分からは、加工された硬居住面、壁の基礎、また焼いた土のかたまりは出土しておらず、その代わりに芦で編んだむしろの跡と捨てられた大量の有機物の堆積が出土した。その建築の形式は、柱を基礎とし、その上に大小の梁（龍骨と言う）を架けて床を支える。以上が、この建築の基盤である。その上にまた柱を立て梁を架けて屋根を作る。例えば、第4層から出土した干欄式の長い家は北西から南東への走向であり、平行する4列の柱がある。長さは23mで、幅は7mである。東北に面する側には幅1.3m位の回廊があって、典型的な干欄式建築である。遺跡で発掘された建築用の木製の構成部品が数千点にものぼり、ほぞやほぞ穴もかなり科学的に造られている。また、この層からは多期の建築が出土しているために、全面的な復元考察をすることは不可能である。しかし、柱を基礎とし、その上に大小の龍骨（梁）を架けて床を支える方法や、家の前に長い廊下がある建築構造、および床にあんべらを敷く習俗などから考えると、朝鮮族の民家とはほぼ同一である。朝鮮族の低床式建築の源泉は、ここにあると考えられる。

5 朝鮮の鳥トーテム文化考

遙か昔から我が国の東部及び東南沿岸に大規模な鳥トーテム崇拝文化帯が存在している。その文化帯は北は中国東北三省の少数民族地域から、南は江蘇、浙江あたりまでであるが、さらに広く見れば、広東、広西、福建、台湾、日本、ベトナム、云南、四川、安徽、湖南、湖北から、遠くはポリネシア、ハワイ群島、タヒチ、サマア、マオリ、ひいては北米の西北インディアン⁽³⁶⁾の居住地にまで広がっている。その範囲の広さと規模の大きさには目を見張る思いだが、朝鮮族も文化の創始者の一員なのである。朝鮮族は鳥トーテム崇拝がかなり強く、それは衣、食、住、行、歌舞、文学芸術、宗教信仰など全ての面に見られる。中国東部及び東南沿岸の鳥トーテム崇拝の文化圏では、鳳凰、雉鳩、燕、カラス、鵲、鶴、鷹及び現在も確認できない鳥類10～20種類がトーテムとして崇拝されている。そのうち鶴崇拝と抽象化されたトーテム—太陽鳥（金鶏）への崇拝は朝鮮族の鳥崇拝の特色である。

まず、鶴を見ていきたい。鶴は朝鮮族にとっては神性のある鳥で、誰かが病気になった場合などは、家族のものが色とりどりの紙で鶴を折る。百以上も折る場合もあり、それを廟に掛けたり家の神棚に掛けたりして災いの解消や病気の除去を祈る。鶴はまた長寿をも意味する。特に老人を祝福する場合に、画師を招き寿鶴図を描かせ長寿と無病を祈願する⁽³⁶⁾。朝鮮の昔話に、鶴が仙女に化けて勤勉で善良な青年と結婚し、彼と年を取った病気がちの母親を助けるという内容が多い。つまり、朝鮮族にとって鶴は親族の災難を払い、平安を守る鳥なのである。このほか朝鮮では仙鶴が身体に入る夢を見て妊娠するとか、人が死ぬとその靈魂は仙鶴となり飛んで行くという信仰もある。それは「トーテム懐中に入らば即ち妊娠、トーテム体を離れれば即ち死亡」というように、これはトーテム信仰に非常に近いのである。それゆえに、鶴を朝鮮民族のトーテムの一つとみなしてもよいのである。

朝鮮族の鶴崇拝習俗は、また彼らの民間舞踏にも表れている。重要なことは、その舞踏に「白鶴飛翔」というモチーフがあるばかりでなく、舞踏の基本的な要素—伝統的なダンスステップにもトーテムとの関連性が見出されるという点である。

東北民族の舞踏は豪放・有力だとして知られる。それは豪快でかつ飾り気のないことが特徴である。ステップは通常、主に蹴りと足踏みで構成されるが、朝鮮族の舞踏はそれとは異なる。特に女子の抒情舞踏は「柔如蠟酒、舞如鶴腿、動如重柳」を追求する。それは、踊るときの手揺らぎが蠟燭の炎のように柔らかく、足の動きが鶴の足のようになやかで、腰の動きが風に揺らぐ垂れ柳のようになやかであることを意味し、舞踏のステップの理想型はここにある。これは「鶴歩」と呼ばれるが、鶴の姿勢を模倣したものである。まず片足を上げ前に向かって円を描く。それから足を収め最初の所よりやや前に止める。それと同時にしなやかに腕で鶴の飛ぶ姿を演じる。李白は「高句麗」という詩で「金花折風帽，百馬小遲回，翩翩舞廣袖，似鳥海東來」と詠み、洗練された言葉で朝鮮族舞踏の基本的特徴を描いた。

「鶴歩」の起源が朝鮮族の稲作文化と関連があるという考え方もある。ぬかるんだ水田で作業

する時、両足は常に泥にはまり自由に前に移動することは難しい。前へ行くためには足をぬかるみから出して前に円を描き、ゆっくり泥水に降ろす以外にはない。時が経ち、人々が動作に慣れたために、それが舞踏のステップへと発展してきたのであろう。筆者は一応この説の妥当性は認めるが、それほど完全な形ではなかったのではないかと考えている。その理由の一つは、中国には多くの稲作民族が存在するのにもかかわらず、なぜ朝鮮族のみにその舞踏のステップが見られるのかということである。明らかに他の原因があるはずである。それは朝鮮族舞踏の鶴歩と、朝鮮族原始のトーテム舞踏との関連性がある。

すべての芸術が実用性から生まれるように、原始舞踏も具体的な社会の需要に応じて生まれた。原始社会では変化の激しい大自然に対して何も為すすべがなかった。資源を克服するために、また神を喜ばせるために彼らはトーテムに扮し踊り歌った。そのことによりトーテムからある種の力を得ることができる。つまり舞踏の飾形態は一般に宗教やトーテムとの関連があるのである。中国の占いを職業とする人をさす「巫」という字と、舞踏芸術をさす「舞」とは本来同一のもので、どちらも[Wu]と発音される。字形の写り変りから見ても巫師の「巫」が舞踏の「舞」から源を発したことがわかる。かつてはこの2つの文字は同じ字だったのである。𠩺，𠩺（卜辞中の「舞」の字）→𠩺，𠩺，𠩺，𠩺，巫（小篆の「巫」の字）→巫（楷書の「巫」の字）。𠩺，𠩺は舞者が牛の尻尾をもっているような形を表す。それは最も古い「舞」の字であり、最初の「巫」の字でもある。古くは巫師（シャーマン）が神に祈ったり祖先の加護を祈願する場合、通常は舞者のとしてであった。巫師つまり舞者であった。満族、苗族、その他の民族でも同じである。そう考えれば、大昔の舞踏は宗教と深い関わりがある。

例えば中国の西北のタジク人は鷹をトーテムとし、その伝統舞踊には鷹が飛んでいる舞踊動作が多い。また、中国東南一帯のショオ（畚）族は盤瓠をトーテムとする。ショオ族の踊りでは踊る人は皆狗頭帽（犬の頭のような形の帽子）をかぶり、斑斕衣の（色が鮮やかな着物）を着る。西南哀牢夷は自らを竜の子孫だと考えており、踊るときに尾のついた服を着る。筆者は貴州の東南部で苗族の民俗調査を行なった時、実際に彼らの伝統舞踊が踊られる場面を見た。男性は雉の羽毛を頭にさし、女性は羽毛をデザインした銀の装飾品を頭につけ、スカートの後には白い鶏の羽毛で飾っていた。このことによって我々は、彼らが遥か昔に鳥崇拜文化圏に属し、鳥トーテム文化の影響を受けたことを認めざるをえない。大昔のトーテム舞踏において、そのトーテムの形で装飾することは一般的である。そうであるなら、朝鮮族の伝統舞踊の中に一即ちトーテムに関する舞踏の中に類似する要素があるのではないだろうか。

その問題を検討するために、筆者は太古の朝鮮の服装様式についての資料を参考にしたのだが、ある非常に興味深いことに気づいた。それは朝鮮人がよく白を尊ぶと言われるように、彼らの服装は古代より白色或いは玉色を主とするということである。ただ、現代の朝鮮の服装はその殆どが白であり、他の色があってもそれほど目立たない。古代の朝鮮族の服装はやや違っていて、特に祭日用の舞踏服装は真っ白（または淡い色）の袖・衿および下部に幅10cmほどの黒い縁を飾り付ける。（図24）『隋書』『東夷伝』に「高麗…人皆皮冠，使人加挿鳥羽，…婦人裙襦加—（衣縁也）。」

という描写がある。これによって、朝鮮舞踏が鶴トーテム崇拜儀式にその源を発したと考えることもできる。鶴の翼の端、首、尻尾に3つの黒い斑点があることから、朝鮮の古舞踏の服装が鶴を模倣して作られたものであると言わざるをえない。また、踊る女性の頭につけられた粗く赤い紐によっても「鶴頂赤」という言葉と関わりが深いと考えることができよう。ただ人々は年月が経つにつれてその本来の意味を忘れてしまったのである。

次に通溝で出土した朝鮮族の祖先の墓室にある壁画をみていこう。墓室は死者の天地であり、死亡してからも常に人々に「魂は故里に帰る」と考えられている。つまり「故郷に帰る」或いは「パラダイスに行く」という意味である。この観念にはいくつかある。「天梯」を媒介とする民族もある。鳥トーテム文化圏に、靈魂が常に鳥を通して（現在は鶏に代わった場合もある）或いは鳥に変身して故里へ帰る。例えば、地方によっては野辺送りをする行列の一番前を歩く人は白い公鶏（雄の鶏）を抱えて行く場合が多い。その目的はその鶏によって死者の霊を故里に持ち帰ることである。また、人は死んでから鳥に変身して故里へ帰るという観念もある。そのタイプの説話が韓国、中国、日本などに数多くある。筆者は裴明海と一緒に編んだ『鳥の伝説』（广西人民出版社出版）に鳥類についての伝説を53話収録している。韓国の崔仁鶴が著した『韓国昔話の研究』（日本語出版）にも若干ではあるが、参考となる現有の資料が収録されている。朝鮮は鳥崇拜文化の創始民族の一つである。鳥崇拜が文学、芸術、衣食住行の各方面に表れているし、喪葬習俗に見られるのも当然である。通溝舞踏塚から出土した壁画から見ると。鳥トーテムはないが上の分析からわかるように、舞姫達の踊る様子が、その挙手投足の間に鶴が空を飛んでいる様子を表しているのである。画を作る動機はおそらくその神聖な天使たちに幻想の世界へ死者の靈魂を持ち帰らせることにあるのであろう。

服装に表れた鶴崇拜の現象は、女性だけではなく男性のそれにも表れている。李朝時代に一時流行した男性服装—「鶴髦衣」（図25）をみてみよう。その形は中国の「長袍」と似ているが、前襟（前身頃）が異なる。その服の袖口及び前襟、衣擺、套擺などに皆10cm程の黒い縁が飾り付けられている。その上に高い帽子を一つ被ると、仙骨かつ高雅であり、かなりの鶴の風骨がある。

朝鮮族は鶴を崇拜するが、ではその観念の源はいったい何処にあるのであろうか。またその発祥地は東南沿岸鳥トーテム文化帯とどんな文化的なつながりがあるのだろうか。

筆者の集めた資料によると、中国の東部及び東南沿岸トーテム文化帯において、北方は主に陸棲鳥類（燕、鵲など）を崇拜し、南方を主に水棲性鳥類（鶴など）を崇拜する。その点から考えて、南方沢国の稲作農業に関連があると思われる。考古的にみても鶴類の姿が描かれている出土物も大体南方からのものである。前に述べたように、呉越地区（江蘇六合県）から出土した「鳥田図」に描かれた鳥がつまり鶴であることは明らかである。史料によると、越王句踐が「長領鳥啄」の「鳥相」としているそうである。明らかにそれは、『民間悉其形以禱之』の祖先トーテム像である。また、「長領鳥啄」の姿も非常に鶴に似ている。

周知のとおり、日本も鶴トーテム文化が非常に発達した国家である。弥生時代の土器と銅鐸に鶴の姿を見付けることはたやすい。日本人からみて鶴には神性があり、稲霊を持ってきて稲の生

長を即すると信じられている。日本の稲作文化が中国に源を発し、朝鮮南部を経て日本へ伝わったというのが通説であり、鶴などの鳥類が稲霊を運んでくるという観念が朝鮮族にも存在するはずである。朝鮮の田舎では稻田の近くに「鳥竿」がさしてあることが多いが、その原始的な意味もここにあるのではないかと考えられる。第2章で分析したように、その観念の発源地は中国の東南にあるはずである。河姆渡でから出土した「雙鳥守禾図」、江蘇六合県から出土した「鳥田図」、いずれも我々にそのことを暗示するのである。

次に朝鮮民族文化の深層に存在していた太陽鳥（金鶏）崇拝をみていきたい。

何が太陽鳥であるのか、また朝鮮の歴史の何朝時代に太陽鳥（金鶏）崇拝があったのか。筆者のこの議題に対して疑問を抱かれるかもしれない。確かに、朝鮮族始祖神話の中に熊、虎、卵に関わるものがあるが、太陽鳥（金鶏）と関係のある記載が見られないからである。その問題を科学的に論じていくために、まず朝鮮族の卵生神話から探っていききたい。

中国東海岸環太平洋鳥崇拝文化帯における、朝鮮の鳥トーテム崇拝はかなり特色がある。普通の東方民族或いは東北民族は自分の祖先が鳥または鳥の卵から出自したと考えている。こういった種類の神話は卵生神話と呼ばれるが、例えば殷商の始祖神話の中に、殷契の母簡狄が燕の卵を食べて妊娠し殷商の始祖契を産んだとある⁽³⁷⁾。満族の始祖神話も、直接的な満族の始祖布庫里雍順の誕生の理由が、その母が神鵲の赤果を食べたからだとしている⁽³⁸⁾。その外、このタイプの伝説は、台湾の高山族、東北の陳巴爾翰族、鄂温克族、シベリアのリクヤーク族、北米のインディアン、ポリネシア群島のハワイ人、タヒチ人、サモア人、マオリ島の住民と非常に広範囲に分布している。

朝鮮族の始祖神話はそれとは異なる。朝鮮族の神話にはその祖先が鳥の卵から生まれたとされるばかりでなく、それと同時に太陽の助けも必要とするのである。鳥と太陽は合一的で、共生的である。この2者によって朝鮮族の始祖は生み出されたといわれる。

例えば高麗始祖神話には次のようにある。大昔、扶餘王解夫妻は老いて子供がなかったために山神を祀り、子供が授かるように祈願した。そして彼は馬に乗って鯤源まで来たとき、2つの大石が涙を流しているのを見た。王が人に命じて大石を移動させたところ、小さな子が生まれた。その子は金の蛙のようであったので、王はその子を王宮に連れて帰り太子とした。金蛙は成長し、その後河伯の娘柳花と結婚した。柳花は日の影を感じて妊娠し、一つの卵を産んだ。その卵は豚や犬に与えても食べないし、通りに捨てても牛馬が踏むこともなかった。そして荒野に捨てると鳥の群れがその卵を突いた。卵を持ち帰ると男の子がからを破って出てきた。彼が高麗の始祖朱蒙である⁽³⁹⁾。

扶餘族は高麗と同源であるためにその始祖神話も同じである。北夷索離国王が外出して帰宅すると、留守番をしていた妃が妊娠していたことに気付いた。逆上した国王は妃を殺そうとしたが「殺さないでください。私は天上から下りてきた『大如鷄子』の気体を受けて妊娠したのです」と妃が弁解したので国王は許した。その後、男の子が生まれるが、国王は妃に命じてその赤子を豚小屋に捨てさせた。しかし、豚はその赤子のために寒気を払った。また厩に捨てさせたが、馬

も赤子を暖めた。それを見た国王はようやくその男の子を認め、「東明」⁽⁴⁰⁾と名付けた。

この他に新羅の始祖も卵生である。六伽倻国王も亀旨峰の6つの黄金卵から殻を破ってこの世に出たといわれている。

以上の事例から、我々は朝鮮始祖誕生神話にその構成の仕組みを読み取ることができるのだが、しかしその神話は発想において明らかな欠落がある。その理由は、論理的に言えば始祖誕生神話はつまりトーテム神話だからである。その第1の要素は、自分の祖先がいかなる動物、植物などに出自するのか、自分の民族が一体どのトーテムに由来するのかについての説明である。しかし、朝鮮族の始祖神話に朝鮮族各支祖先がすべて卵から誕生したことを述べているにすぎず、その卵が何の鳥の卵なのかについての説明はなされていない。それは満族の始祖が鵲であるという説、及び殷商の始祖が燕であるという説とは大きく異なる。その点だけからみても、絶対に整然としたトーテム神話とは言えない。その相違は朝鮮始祖神話の中に見いだされる、太陽文化に起因するのである。

前に引用した朝鮮族の各支始祖神話中に、その始祖が同じく卵から生まれたとある。―それは朝鮮トーテムが確かにある鳥類と関連があることを説明している。と同時に、太陽とも何らかの関連性があるように見える。例えば、高麗神話の中に柳花が妊娠し卵を産んだのは、明らかに日光が照らした結果である。太陽の光がなければ、祖先の誕生は成立しない。扶餘神話に、王妃が天上から下りてきた「大如鷄子」の気体を受けて妊娠したと自称するが、その気体は何であるのかわからない。しかし、高麗と扶餘が同源であり神話も類似することから考えて、その天から下りてきた気体が太陽と関係がある可能性はかなり高い。古代においては、男女の交合は男性の女性に対する「施気」であり、女性が「受気」することによって妊娠生育すると考えられていたのである。この神話を記録した漢代の大学問家王充はその著書『論衡』に以下のように記している。「凡人受命，在父母施氣之時，已得吉凶矣」扶餘神話ではすでにその「施気」の主体が他処にあるのではなく、天上にあると明確に指摘している。もし高麗神話と結びつけて分析すれば、その「施気」の主体は上空にある太陽である。以上のことからわかるように、朝鮮族の始祖神話に2つのトーテムの存在が明らかになった。つまり、一つは鳥であり、今一つは太陽である。ここで注目すべきは、この2つのトーテムが互いに孤立しているのではなく、調和する統一的な存在であるという点である。太陽は鳥であり、鳥は太陽である。この2者がひとつとなり、結局一羽の金色の翼をもつ太陽鳥の姿として描かれたのであって、それは朝鮮族の原始トーテム崇拝の複合的特徴を表すのである。

朝鮮族にみられる、鳥と太陽が人類の始祖をなす太陽鳥型神話は孤立した民俗現象ではなく、独自の文化的背景がある。「羿射九日」の話に出てくる「日中鳥」は、鳥と太陽が共同体した太陽鳥の姿であって、それゆえに『淮南子』のなかに「堯乃令羿射十日，中其九日，日中鳥尽死」と記載された。その観念は朝鮮族の日鳥共同体の原始観念と通じている。では、その観念の分布する範囲はどれくらいなのであろうか。それが明らかになれば、朝鮮族の日鳥共同体観念の源泉の解明や、朝鮮族自体の出自と源泉を探るために大きく役立つであろう。

『山海経』『海内経』の中に「帝俊賜羿彤弓素殳以扶下国」という記述がある。帝俊は東方大帝であり、東夷を統制した。そのことにより、少なくとも北は渤海湾から南は山東、江蘇一帯に至る範囲に羿の足跡が残された。また、『山海経』の「羿与鏿齒戰於寿華之野」という記述も参考となろう。鏿齒つまり齒を抜く習俗は原始民俗であり、潘其風、韓康信の考証によれば、その習俗は広範囲に分布しており明らかに齒を抜く習俗のあった遺跡の多い地域は山東、江蘇一帯であるという。その中に山東泰安大汶口、曲阜西夏侯、兗州王因、邹県野店、茌平尚庄、諸城呈子、胶県三里河及び江蘇邳県大敦子等がある。この他にも江蘇南部の常州圩敦、上海崧沢、福建閩候曇石山、珠江デルタの佛山河宕と増城金蘭寺、漢水流域の河南浙川と湖北房県七里河などがある。これに関連する新石器文化は黄河下流、長江中下流域の大汶口文化、屈家嶺文化、馬家浜文化、良渚文化、また華南にある幾何印紋陶の分布する地域を含む⁽⁴¹⁾。古籍に「羿射十日」の記載や「羿戰鏿齒」の記述があることから、鏿齒民と日鳥共体信仰に一定の結びつきのあることが理解されよう。後でこれらの考古資料を裏付ける文献資料を提示する。

上述した鏿齒民が生活していた地域において、新石器時代に鳥形器と呼ばれる鬻が広く使われていたが、それを鳥鬻といった。(図26) 石光邦によれば「大汶口文化の中の『標準化石』の鬻形器は鳥の化身であり、その文化において最も典型的なものである。早期の鬻は長い首に把手のついた腹の平たい実足鬻であった。把手が高く突き出し、末端の部分が平たく突き出ており鳥の尻尾に似ている。中後期の鬻はより鳥の形に似ている。長い首は鳥の首を表し、流口は鳥の嘴を表す。腹部には3本の足があり、前の2本は丸く鳥の胸部と似ており、後の足は尻尾が地面に着いている様子と似ている。鬻の形はさまざまで、よく見ると長い首の鶴、鷺が首をもたげて鳴いている様子、水平に正面を見ている姿などがある。」⁽⁴³⁾ (図27) 高広仁、邵望平も鳥形鬻が最初山東にその源を発し、その後中原、東北の遼東地方に広がり、さらに長江流域、広州まで南下したと主張する⁽⁴³⁾。以上のことから鬻が齒を抜く習俗と同一の文化圏にあることは明らかであろう。筆者はその3本足の陶鬻が象徴されるのは、神話の中で太陽にいとされる「三足鳥」すなわち「三足鳥」であると考えている。上古時代において鳥と鳥は同義であった。言い換えれば、遙か昔その地域の人々は太陽の中に鳥がいて、鳥と太陽が一体化していると深く信じており、自分たちが太陽鳥の子孫だとまで思ったのかもしれない。

前述したが、その文化にはかなり馬家浜文化が浸透している。一方、考古学の資料によって、馬家浜文化と朝鮮族の南方祖先貊族が創り出した河姆渡文化の密接な関連性が示されている。そう考えれば、貊人による河姆渡文化の中に鳥日共体の痕跡があるはずである。河姆渡文化は我々にそれに関する資料を提供してくれる。

河姆渡遺跡から骨匕柄(柄長14.5cm、幅3.9cm)が出土した。(図28) 正面には雙頭鳥模様が2組が彫刻されていて、各組の頭が互いに背を向け合い、体が一体になっている。その真ん中に太陽が一つずつ描かれており、一方は大きく他方は小さい。ひとつはきらきらと輝いているが、もうひとつは光がない。その理由は、2つの太陽が牡・牝という異なる性を表しているのかもしれない。それは4、5千年後の百越銅鼓の正面に描かれている太陽模様が牡牝の区別があるのと同

様である。

また、河姆渡遺跡から象牙板が一枚出土した。(図29) その上には背を向けて飛んでいる2羽の鳥が刻まれている。真ん中には太陽があってその周りには炎の模様がある。これも大昔の河姆渡人の鳥日共体の観念の表れであろう。

1982年に我が国の考古学者が、浙江紹興城南にある坡塘公社獅子山の北坂に戦国初期の越人貴族の墓を発見した。出土した随葬品は1244点であったが、その中に銅製の家屋模型がある。(図30) その模型の高さは17cmで、屋上の形状は四角錐、その上にトーテム柱が立っている。柱の高さは7cmで、横切面は八角形、柱体の各面にS形の勾連雲の模様がある。頂上には尻尾の大きな鳥がしゃがんでいる姿が鋳造されている。ある学者は斑鳩だと主張しているが実際はそうではなく、筆者はその鳥を太陽鳥だと考えている。それは細かく観察すればわかるが、トーテム柱にしゃがんでいる鳥の体に光り輝く太陽が刻まれているからである。

明らかに太陽と鳥の同体共生の観念が河姆渡の後人—朝鮮民族に大きな影響を与えていた。太陽の光を受けて鳥の卵を産み始祖を創り出すという神話とその観念は、言うまでもなく後世の文化の中のあらゆる面に表れている。

朝鮮の古青銅鏡の模様に「雙鶴飛雲紋」或いは「雙鳳華綬紋」という模様が多く見られる。その銅鏡は中心に太陽があり、2羽の鶴或いは鳳凰が太陽を回って飛んでいる姿が刻まれている。

(図31) その模様は太陽と鳥の内在関係を意味し、鶴と鳳凰がいずれも太陽に従う鳥だという本質的な属性を暗示しているのである。それは全ての東夷民族が、太陽を崇拝すると同時に鳥も崇拝するという2層トーテム文化の性格ともまた一致している。

また朝鮮族の伝統的絵画に「紅白白鶴図」と呼ばれる画軸が見られる。白い鶴が枝に立っており、その後は真っ赤な太陽である、これら様々な現象を単なる「偶然説」として片付けてしまうことは、牽強附会の虞となるであろう。

「団鶴」も朝鮮族の装飾芸術に見られる模様である。(図32) その模様は遠くから見ると太陽に見え、近づくと2羽の鶴が向かい合って飛んでいるように見える。その模様は朝鮮族の日鳥共体の観念の十分な形象化と、自らの原始文化への深い理解を表すものなのである。

(待続)

注

- (1) ここで言う「南方民族」は朝鮮族が北上する前に確かに長期に渡ってなんぼうに住んでいて、また素晴らしい南方稲作文化を創り出したことを指す。朝鮮族の祖籍は、いったいどこかという問題は、その族源の構成が複雑なため、別の機会に残すほかない。
- (2) 司馬遷 『史記』「五帝本記」
- (3) 何光岳 『百越源流史』 332ページ。江西教育出版社
- (4) 何光岳 『東夷源流史』 459ページ。江西教育出版社

- (5) 孫進巳 『東北民族源流』 118ページ。黒龍江人民出版社
- (6) 衛聚賢 「吳越積名」『吳越文化論叢』 1－4 ページ。
- (7) 范曄 『後漢書』「東夷伝」
- (8) 范曄 『後漢書』「張堪伝」。「拌漁陽太守，……乃于狐奴開稻田八千余頃，以致殷富。百姓歌曰：『桑無附枝，麦穗兩枝。…』」
- (9) (韓国) 高麗大学民族文化研究所 『韓国民族大観』 1 158ページ。著者は無文の土器文化と上述した有文の土器具とは全く違う性格を持つ。朝鮮半島で無土器がいつから始まったのか，その正確な年代はもう非常に考察しにくい，青銅器の年代から換算すると，紀元前10世紀以前のものと見なしていいと思う。
- (10) 『淮南子』。「堯時十日並出，草木焦枯。堯命羿仰射十日，中其九」
- (11) 『述異記』卷上
- (12) 袁軻，顧実などの先生はこの説を支持している。
- (13) 王大有 「中華民族祖先生活の生活地域範囲の管窺」『人民日報』海外版 1991年2月26日版
- (14) 梁釗韜 「百越の中華民族誕生に対する貢献一濮，菜の關係及びその流伝」『百越民族史論集』 中国社会科学出版社 1982年版
- (15) 蔣炳釗等著 『百越民族文化』が汪濟英の『越史瑣議』（未刊）を引用したもの。
- (16) 陳国強 「我が国の東南にいた古代越族の来源と迁徙」『民族研究』 1980年第6期
- (17) 夏涿 「古文字が反映した南方民俗の拾零」『百越史研究』 貴州人民出版社 1987年版
- (18) 「桐鄉羅家角遺跡の発掘報告」『浙江省文物考古書学刊』 1981年刊，「長江中下游で出土した古稲の考察報告」『云南農業科技』 1981年第6期
- (19) 丁穎 「中国稲米品種の生態類型と生産の發展の關係」
『農村水産技術會議調查資料』 44
- (20) 「河姆渡遺跡の動植物遺存の鑑定研究」『考古学報』 1987年第1期
- (21) 中国社会科学員考古研究所編『新中国の考古發現と研究』 文物出版社1984年版145ページ
- (22) 「崧沢遺跡の胞粉分析研究」『考古学報』 1980年1期
- (23) 周振鶴，游汝傑「方言と中国文化」 上海人民出版社 1987年8月版 113ページ
- (24) (日) 岡崎文夫 「中国古代稲米稲作考」『大陸雜誌』第10卷第7期
- (25) (日) 西嶋定生 「中国古代農業の發展過程」『農業考古』 1981年第2期
- (26) 同上
- (27) 陳龍 「島田考」『福建文博』 1980年第2期
- (28) 陳橋駅 「『論衡』と吳越歴史地理」『浙江学刊』 1986年第1期
- (29) (日) 川添登 『民と神の住居』（日本語版）206ページ
- (30) 同上 205～206ページ
- (31) (日) 佐々木高明 「照葉樹林文化への道」 紹亭編訳『云南と日本の尋根熱』 75ページ

- (32) 李瑤 『中国栽培植物発展史』 科学出版社
- (33) 河野友美 『日本人の調理器具』 29ページ 玉川選書128
- (34) 『魏書』「僚伝」
- (35) 馬学良, 今旦訳注 『苗族史詩』 205ページ 中国民間文芸出版社
- (36) 朝鮮の長寿を主題とした絵画に「十長生」がある。十種の長寿の象徴物はそれぞれ日, 雲, 水, 石, 松, 竹, 芝, 亀, 鶴, 鹿である。その中で鶴が最も多い。
- (37) 簡狄が卵をのむ神話は「呂氏春秋」, 「淮南子」, 「春秋繁露」, 「列女伝」, 「拾遺記」, 「路史」, 「詩経」, 「楚辞」などの古籍にすべて収められている。そのなかに司馬遷の『史記』「殷本紀」の記載は最も詳細である。以下に紹介したい。「殷契, 母曰簡狄, 有娥氏之女, 為帝魯次妃。三人行浴, 見玄鳥墮其卵, 簡狄取吞之, 因孕生契, 契長而佐禹沿水有功, 帝舜乃命契曰, 『百姓不親, 不品不訓, 汝為司徒, 而敬敷五教, 五教在寬。』封于商, 賜姓子氏。」関連する研究は, 拙著「簡狄吞卵神話と上巳祈子習俗」『民間文学論壇』 1991年2期
- (38) 佛庫が果実を呑む神話が頗る多い。その中に「満文老档」に記載されているものが最も簡素で明快である。「古い話だが, 布爾和里池に3人の女性, 恩古倫, 曾古倫, 佛庫倫が沐浴しに来る。最後の女性が神鵲が銜えてきた果実をとり口に入れた。それが喉を過ぎると彼女は妊娠して布庫里雍順を生んだ。」筆者はこの神話の原型は佛庫倫が鵲の卵を呑むことだと考えている。果実を呑むという形態は満族の祖先が北方の薩満族における胎児樹 (Omija Muomi) の果実を呑み妊娠するという宗教信仰の影響の結果であろう。この見方については拙著「殷商と満族始祖神同源考」『民族文学研究』 1991年4期を参照
- (39) 『魏書』・「高句麗伝」, 「好相国文集」等は参考となる。高麗人は始祖が朱蒙だといひ, 善射者も朱蒙だといひ。満族は善射者を卓琳奔阿といひ, 「卓」は「朱」と発音が近い。「琳」は発音器官を意味し, 「奔阿」は「蒙」と発音が近い。そのことは, 満族が朝鮮族に対して影響を与えたのか, 或いは朝鮮族が満族に対して影響を与えたのか, それともこの2者は同時ある文化源から影響を受けたのであるか, これからの研究が望まれる。
- (40) 『魏』, 『梁書』が参考になる。
- (41) 中国社会科学員考古研究所 『新中国の考古発現と研究』 文物出版社
- (42) 石興部 「我が国の東方沿海と東南地域の古代文化における鳥類の図像と鳥祖先の崇拝についての問題」『中国原始文化論集』 文物出版
- (43) 高広仁・邵望平 「史前陶器鬻初論」『考古学報』 1981年4期

(沈雪軍, 陳必成・筑波大学歴史・人類学系研究生, 上野稔弘, 小林孝純, 門間理良, 森部豊, 宋軍, 宇都博一・筑波大学大学院歴史・人類学研究科 訳)

[論文参考図]

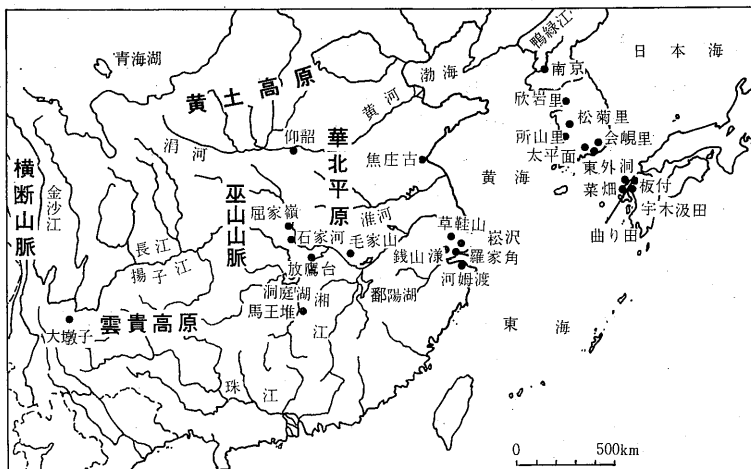


図 1

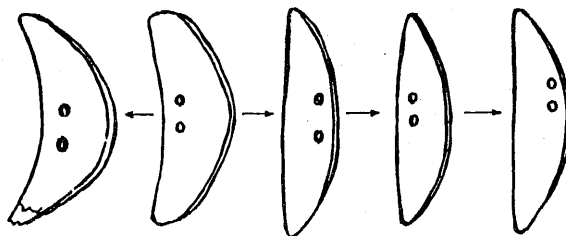


図 2

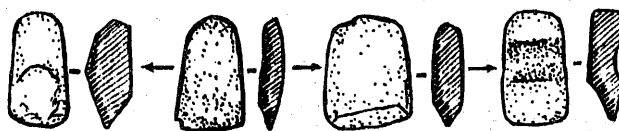


図 3

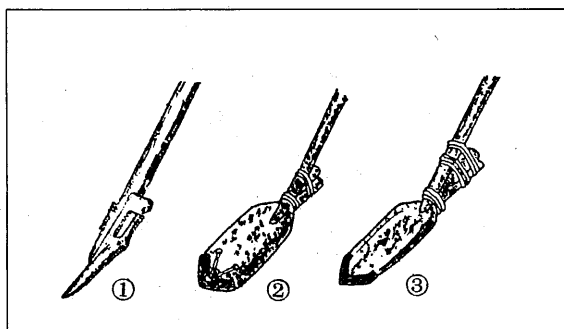


図 4

图 5

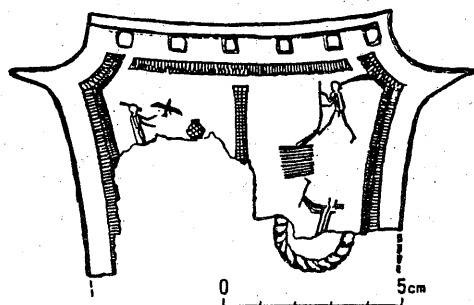


图 6

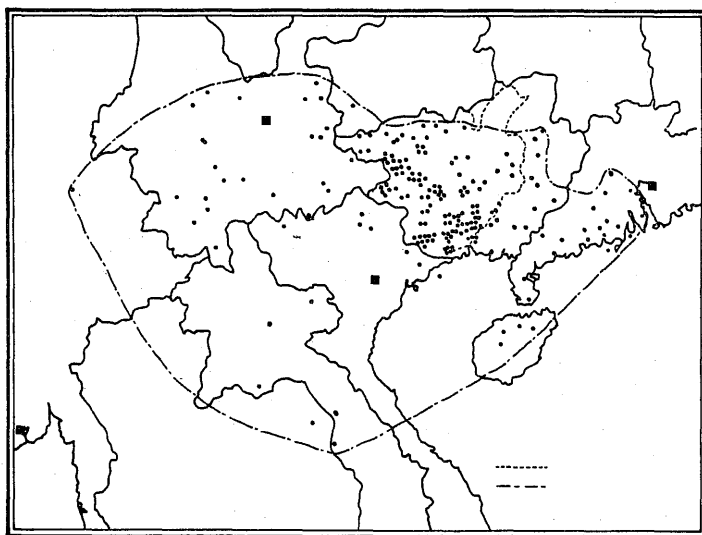


图 7

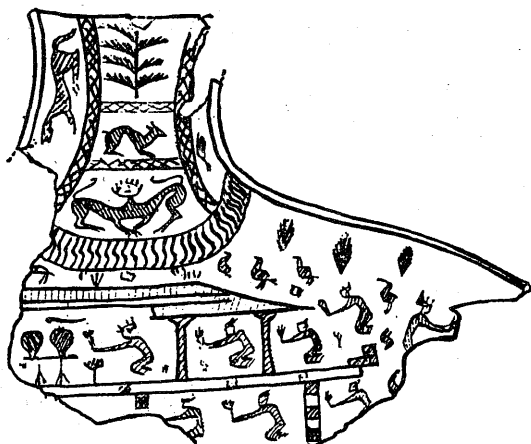


图 8

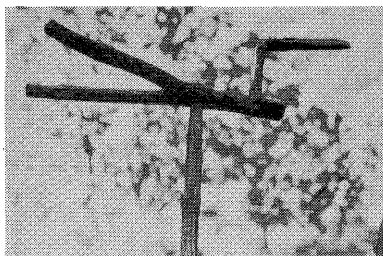


图 9



图 10

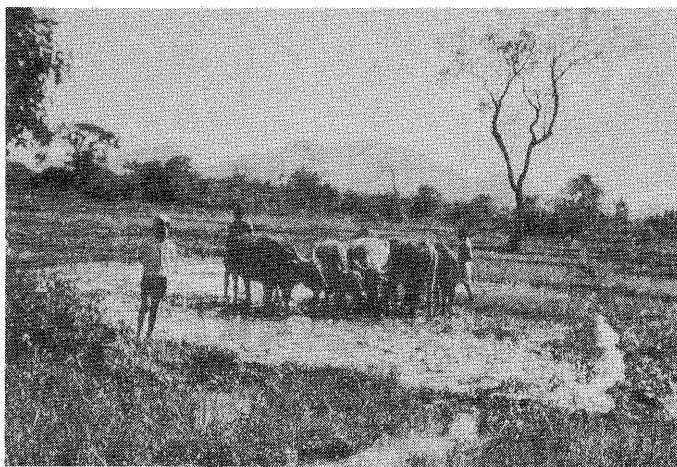


图 11

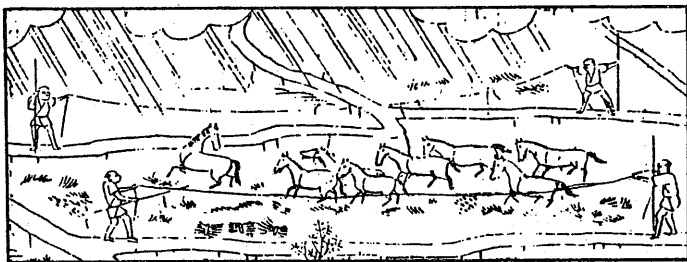


图 12

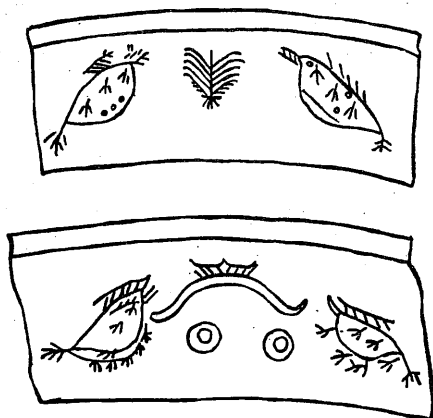




图13

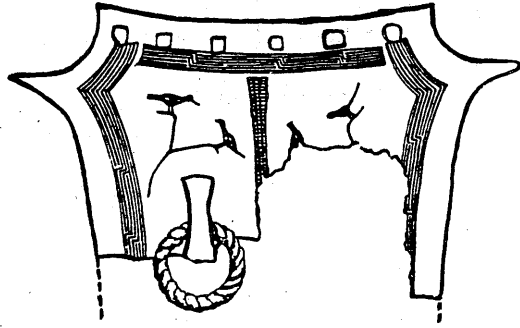


图14

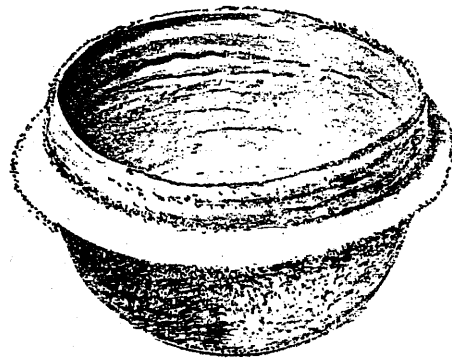


图15



图16



图17

图18

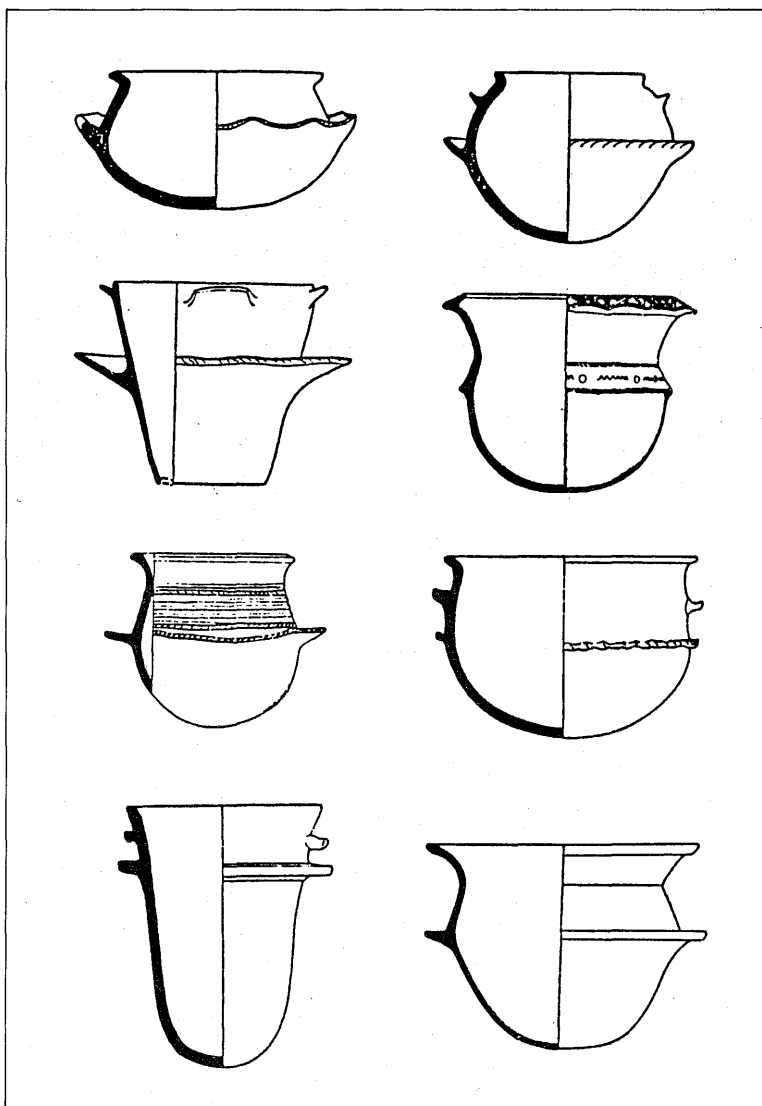


图19

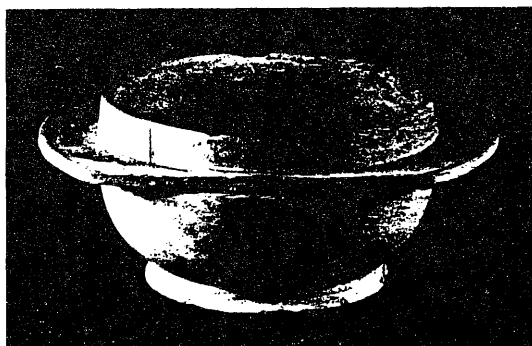




図20

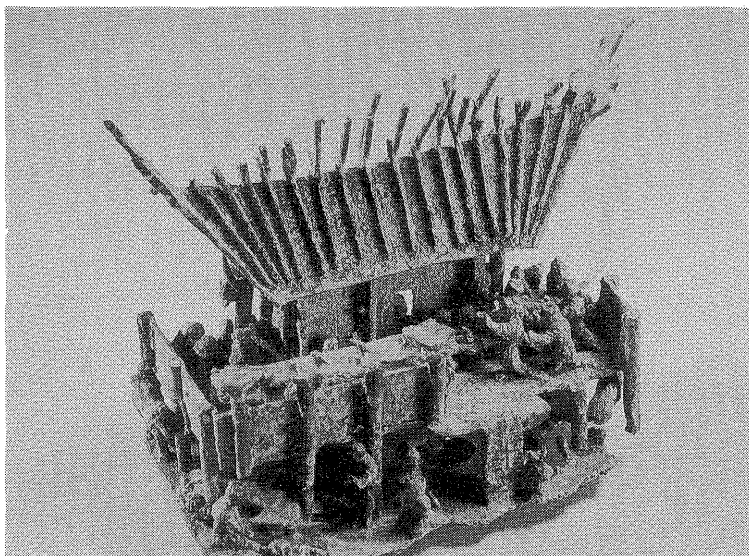


図21

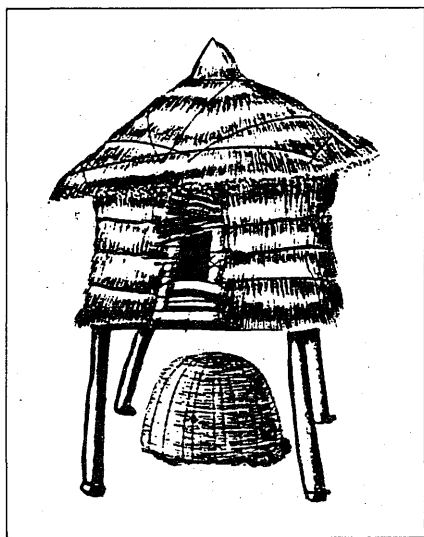


图22



图23



图24



图25

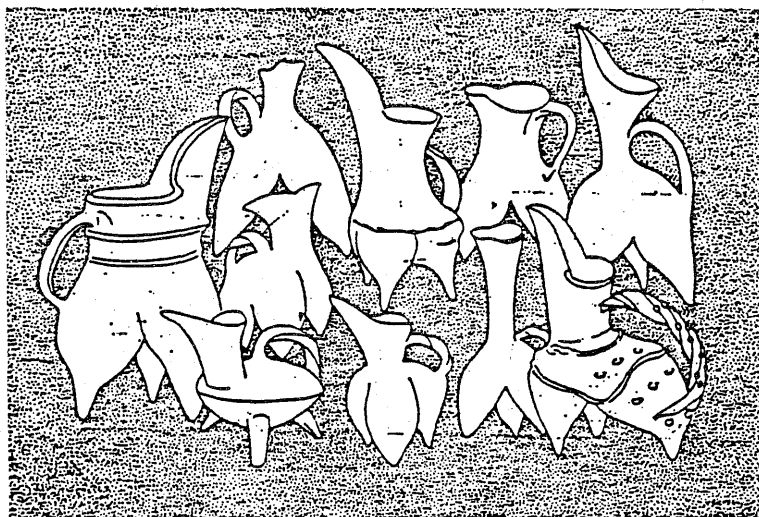


图26

图27



图28

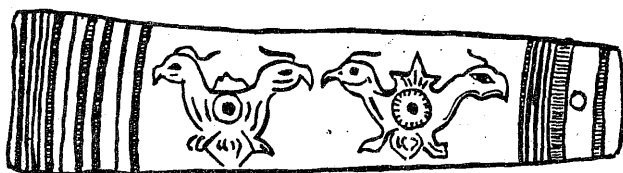


图29



图30

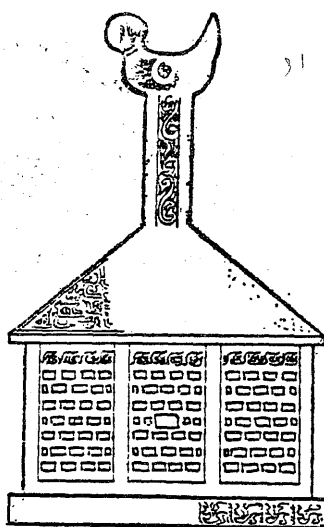


图31



图32